

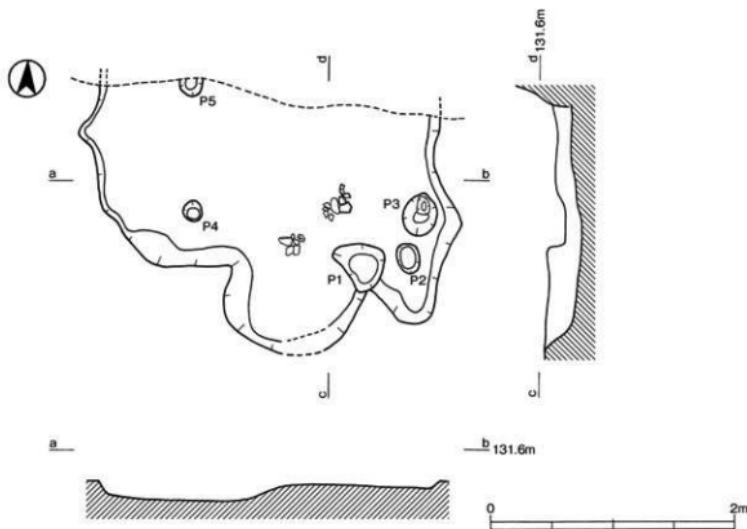
第90図 20号竪穴住居跡

20号竪穴住居跡 (第90図)

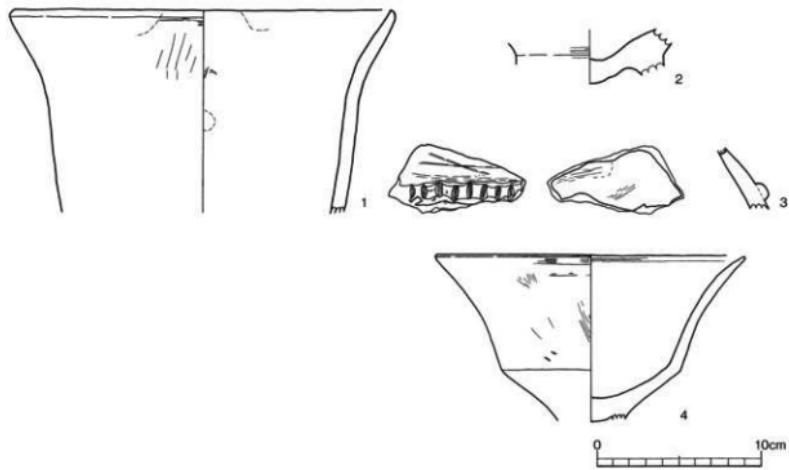
B・C-17区、IIIa層で検出された。平面形は、長軸約250cm×短軸約234cmの方形である。検出面から床面までの深さは約14cmである。北側は削平を受けていたため全体的なプランは検出されなかった。この区域は平成13年度の調査で、竪穴住居跡が多数検出された場所であるので、竪穴住居跡が検出されることを想定して掘り下げを行った。結果、方形に埋土の色の違いが確認できた。さらに4cmほど掘り下げると、この住居の床面と思われる硬化面が、明瞭に残存していた。この住居内には、7基のピットが検出された。ピットの配列は、やや規則的な様相を呈している。それぞれのピット間の距離は、P1→P2、P2→P3、P3→P4、P3→P5、P5→P6が約80cmと等間隔である。また、P6→P7が約40cmでP4→P5が約100cmである。これらのピットはそれぞれの間隔が比較的等間隔になることから、この住居に伴う柱穴であると考える。

21号竪穴住居跡 (第91図)

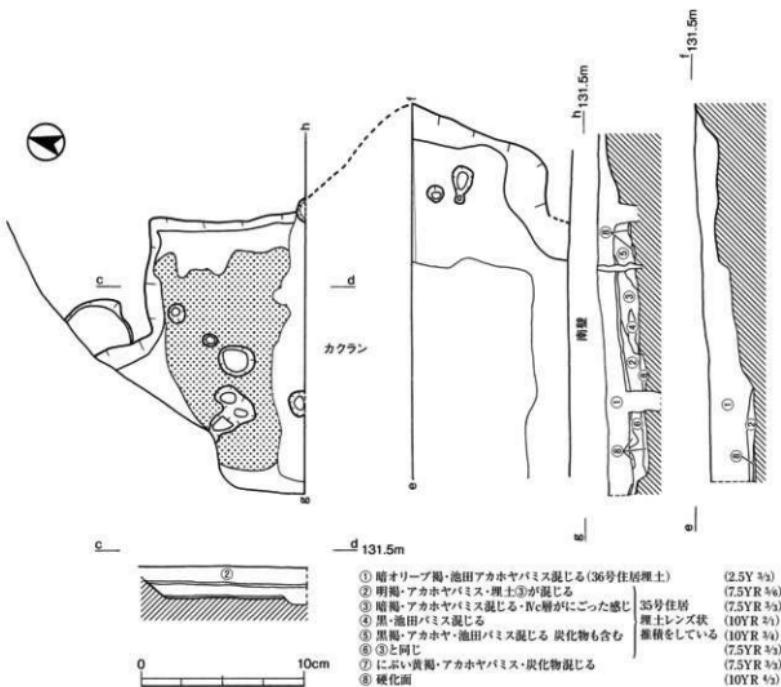
C・D-17区、IIIa層で検出された。平面形は長軸約280cm×短軸約200cm (+a) の不定形である。北側は調査区外であったため発掘調査をすることができなかった。全体を掘り下げていくと、不定形に埋土の色の違いが確認できた。南北方向と東西方向に、ベルトを設定して掘り下げを行った。この住居は南側に張り出しをもつ住居であることが確認できた。検出面から床面までの深さは約22cmである。掘り下げていくとこの住居の床面と考えられる硬化面が明瞭に残存していた。ピットが5基検出された。このピットはこの住居の柱穴に伴うものかどうかは不明である。遺物は床面よりやや上位で、高坏の脚部片が出土した。また、住居の埋土中からは成川式土器の甕の小片や高坏等が出土し、接合作業等を経て4点を図化した。



第91図 21号竖穴住居跡



第92図 21号竖穴住居跡出土遺物



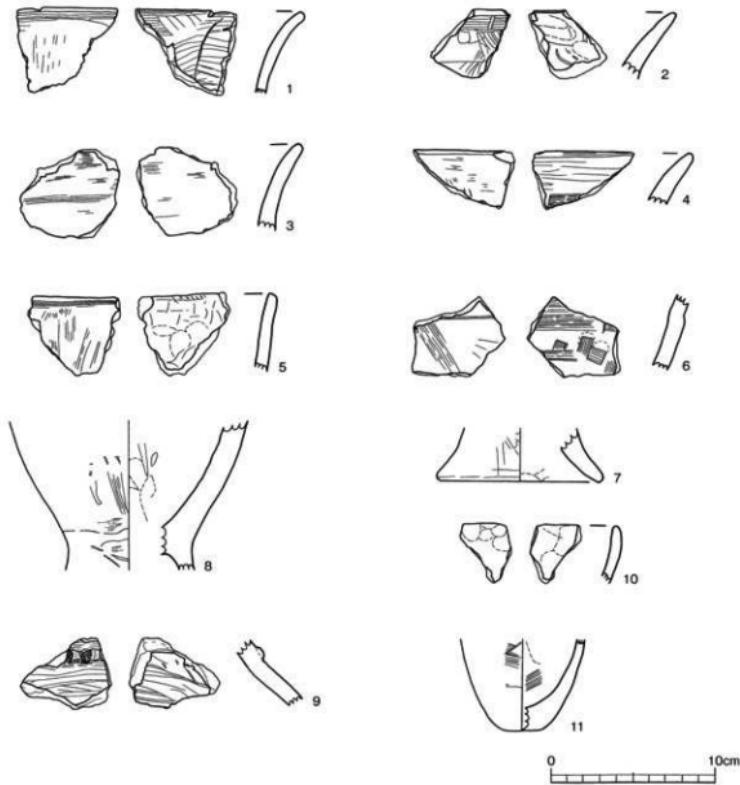
第93図 22号竖穴住居跡

21号住居出土遺物 (第92図 1~4)

1は壺形土器の口縁部・胴部である。口唇部は、舌状になり頸部から外側へやや外反する器形を呈している。2は壺形土器の底部で、底部中央部の外面は外側に向かって肥厚している。3は壺形土器の肩部で外面に一条の突帯を有し、突帯の調整はヘラによる刻みである。4は高坏の坏部であり、底部付近で明瞭な段を持ち、そこから口唇部に向かってやや外反していく器形をしている。

22号竖穴住居跡 (第93図)

D-17・18区、Ⅲa層で検出された。平面形は長軸約520cm×短軸約360cmの不定形である。検出面からの床面までの深さは約20cmである。Ⅲa層上面で埋土の色の違いを確認し、掘り下げを行った。住居の中央部には東西方向に延びる農業用水パイプが埋設されていたので、この部分は調査することはできなかった。この灌漑用パイプを挟む形で、南側にも不定形の色の違うプランが検出された。北側と南側のプランを掘り下げていくと、この住居の床面と思われる硬化面が明瞭に残存していた。北側南側の床面のレベルがほぼ同じであるので、同一の竖穴住居跡であると考えられる。この硬化面を剥がしていくと、硬化面の下からまた新たな硬化面を検出することができた。この住居からピットを6基検出した。ピットの形状は梢円形を呈しており、P4は不定形であ



第94図 22号竪穴住居跡出土遺物

る。隣り合っているピット間は、約40cmと約20cmである。ピットは規則的に配列していない。このようなことから、これらのピットはこの住居に伴う柱穴かどうかはわからなかった。

この住居からは甕や高杯の小片が出土し、接合作業等を経て、11点を図化した。

22号竪穴住居跡出土遺物 (第94図 1 ~ 11)

1~5は壺形土器の口縁部である。1・3の口唇部は平坦で、2・4の口唇部は舌状になっている。1~3は外側に外反する器形をしている。5の口唇部は平坦であり器形は、やや直立するタイプである。口唇部の器形はやや内弯している。6は壺形土器の頸部～胴部である。頸部に段がつき明瞭な稜をもつものである。頸部はヨコナデで調整されている。7は壺形土器の底部である。9は壺形土器の肩部である。肩部に一条の突帶を有し、突帶は布目刻みによる調整がある。8は壺形土器の底部で、底部内面には、研磨して調整した痕が見える。10はミニチュア土器の口縁部で11はミニチュア土器の頸部～底部である。使用目的としては何かの飲用器として使用され

ていたものと考えられる。

23号竪穴住居跡（第95図）

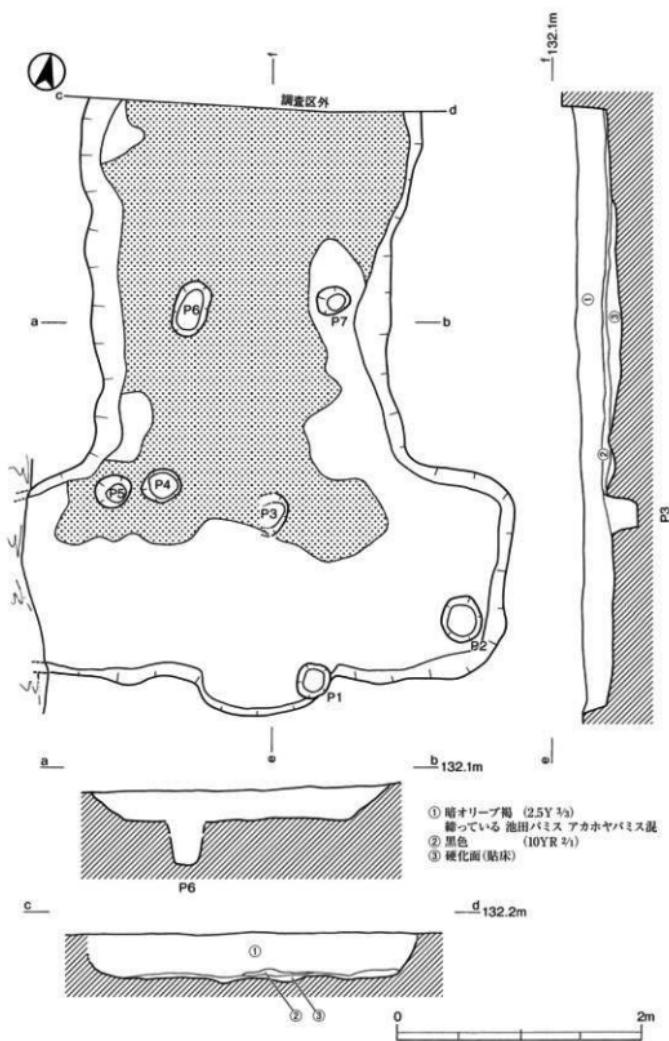
B・C-18区、Ⅲa層で検出された。東側と西側のプランは、Ⅱ層が残っていたため確認できなかった。そこで、床面を検出し、その後床面から壁を検出していく方法を用いて調査を行った。平面形は、基本的に長軸約500cm×短軸約244cm (+ a) の長方形プランであるがこの住居の形状は、南側の東西方向に張り出しがあり「T」字形を呈している。北側には農業用水パイプが埋設されていたため、この部分は調査することはできなかった。この住居の西側の張り出し部はイモ穴により削平を受けていた。検出面から床面までの深さは約20cmである。埋土を掘り下げていくと、硬く締まった貼り床面が確認できた。当時使用していた床面と判断した。南側ではこのような、貼り床は確認することができなかった。

この住居から7基のピットが検出された。7基のピットの形状は、楕円形である。それぞれのピット間の距離はP1→P2、P1→P3が約140cm、P3→P4が約100cm、P4→P5が約40cm、P6→P7が約120cm、P6→P5が約160cmである。これらのピットのほとんどは、住居の縁辺部に位置している。住居の貼り床を掘り下げた後にピット4、ピット5が検出された。このようなことから、これらのピットは、この住居に伴う柱穴であると考える。

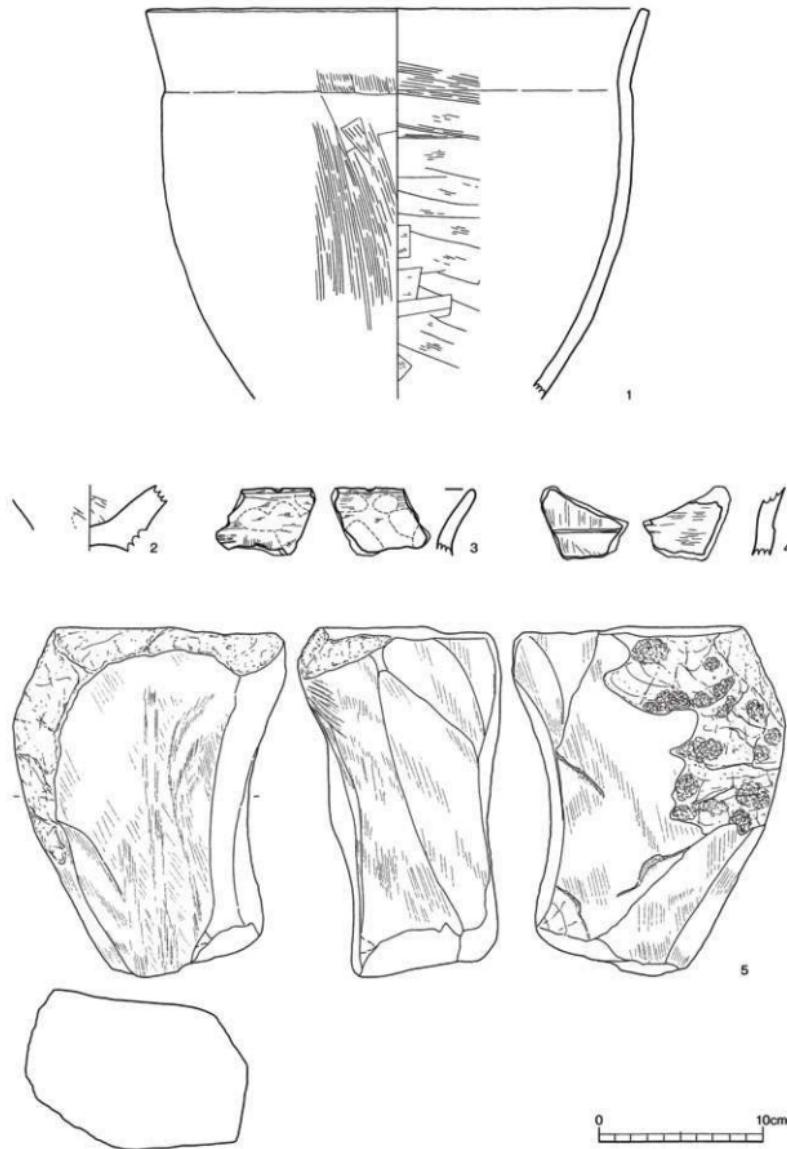
この住居から床直上で、壺形土器が出土し、接合作業等を経て4点の土器と2点の石器を図化した。

23号竪穴住居跡出土遺物（第96図・97図 1～6）

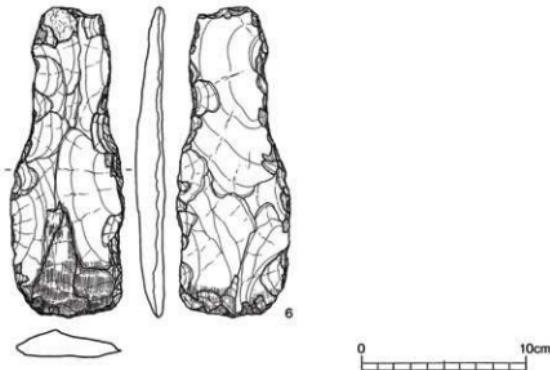
1は床直上で、出土した壺形土器である。16点を接合して、胴部～口唇部までを復元した。口唇部は平坦で頸部でしまり、口縁端部に向かってやや外反していく器形を呈する。頸部にはつきりとした稜線をもつタイプである。調整は、頸部に搔き上げによる調整があり、外面はハケメによる調整である。内面はケズリによる調整である。底部付近の外面が赤化している。これは火熱を受けたものであろうと考える。2は壺形土器の底部である。3は壺形土器の口縁部である。口唇部は平坦であり、頸部に搔き上げによる調整がみられる。4は壺形土器の頸部である。6は扁平の蝶を利用した打製石斧である。研磨した痕は確認できない。土掘具として使用されたものであろうと考えられる。



第95図 23号竪穴住居跡



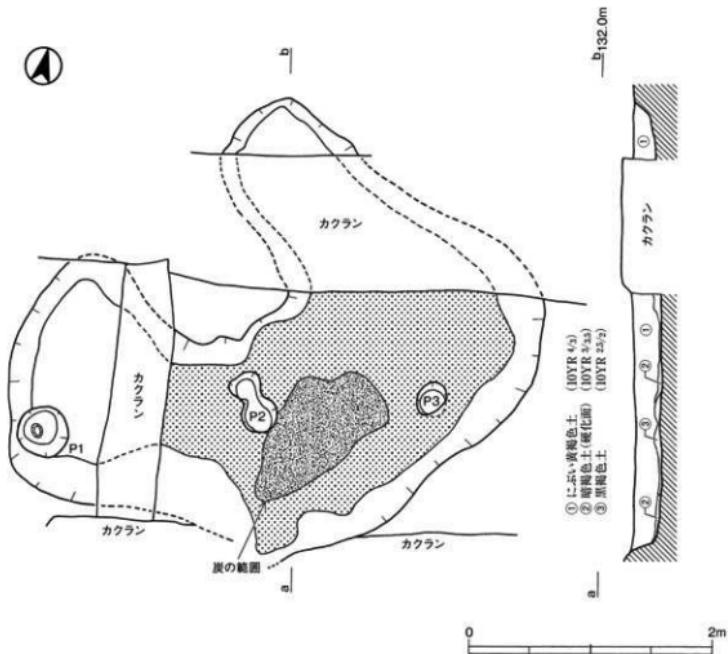
第96図 23号竪穴住居跡出土物(1)



第97図 23号竪穴住居跡出土遺物(2)

第25表 21・22・23号竪穴住居跡出土遺物観察表

構図	住居 NO	番号	器種	部位	口径			底径	高さ	調整・文様		色調		施土	備考
					φ	φ	φ			外面	内面	外	内		
92	21	1	甕	口縁～胴部	23	—	—	—	丁寧なナデ	工具ナデ	昭赤褐	暗赤褐	石英、長石、角閃石	—	
		2	甕	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	暗赤褐	石英、長石、角閃石	—		
		3	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	根	根	石英、長石、角閃石	—		
		4	窓	窓枠	19.5	—	—	ミガキ後ナデ	ナデ	根	根	石英、長石、角閃石	—		
94	22	1	甕	口縁部	—	—	—	工具ナデ	ナデ	昭赤褐	明赤褐	石英、長石、角閃石	—		
		2	甕	口縁部	—	—	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	黒褐	明赤褐	石英、長石、角閃石	—		
		3	甕	口縁部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	根	根	石英、長石	探討着		
		4	甕	口縁部	—	—	—	ハケメ後ナデ	ナデ	にぶい赤褐	暗赤褐	石英、長石、角閃石	—		
		5	甕	口縁部	—	—	—	ハケメ	ナデ	赤褐	にぶい赤褐	石英、長石、角閃石	—		
		6	甕	頸部	—	—	—	ハケメ後ナデ	ハケメ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	石英、長石、角閃石	—		
		7	甕	底部	—	9.7	—	ハケメ後ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	石英、長石、角閃石	—		
		8	甕	底部	—	—	—	ハラミガキ	ハラミガキ	にぶい根	黒褐	石英、長石、角閃石	—		
		9	甕	肩部	—	—	—	ハケメ	ハケメ後ナデ	根	根	石英、長石、角閃石	—		
		10	口縁?	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい根	にぶい根	石英、長石、角閃石	—		
		11	口縁?	測～底部	—	2.6	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	昭赤褐	明赤褐	石英、長石、角閃石	—		
96	23	1	甕	口縁～胴部	30.8	—	—	ハケメ	カズリ	昭赤褐	明赤褐	石英、長石、角閃石	—		
		2	甕	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい青	石英、長石、角閃石	—		
		3	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	黒褐	にぶい根	石英、長石、角閃石	—		
		4	甕	頸部	—	—	—	ハケメ後ナデ	ナデ	昭赤褐	暗赤褐	石英、長石、角閃石	—		
構図	住居 NO	番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量						備考	
96	23	5	結石	砂岩	21.4	16.9	9.8	5100	—						
97		6	打制石斧	ホルンフェルス	19	7	1.6	250	—						



第98図 24号竪穴住居跡

24号竪穴住居跡 (第98図)

C-17・18区、Ⅲa層で検出された。平面形は、長軸約434cm×短軸約370cmの不定形である。北側の一部と西側の一部は農業用水パイプが埋設されていたため、この部分は調査することができなかった。Ⅲa層上面で埋土の色の違いを確認し、南北方向にベルトを設定して掘り下げを行った。検出面から床面までの深さは約38cmであった。埋土を掘り下げていくとこの住居の床面と思われる硬化面が明瞭に残存していた。3基のピットが検出された。これらのピットの形状は楕円形であり、それぞれの距離は、P1→P2が約160cm、P2→P3が約130cmである。また、これら3基のピットは直線上に並ぶので、この住居に伴う柱穴ではないかと考えられる。

遺物は、甕形土器や壺形土器等が出土し、接合作業等を経て7点を図化した。

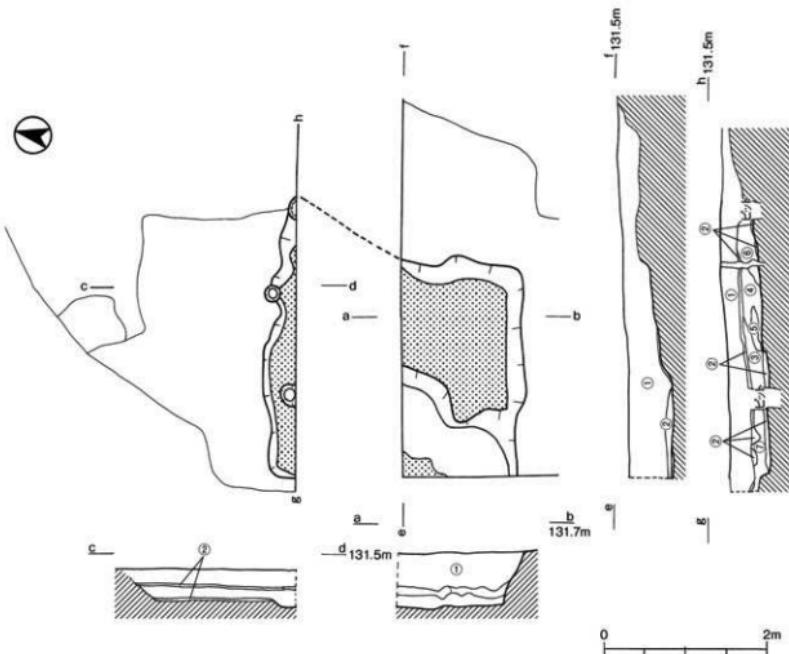


第99図 24号竪穴住居跡出土遺物

24号竪穴住居跡出土遺物 (第99図 1 ~ 7)

1 ~ 3 は菱形土器の口縁部～胴部である。1・2はともに一条の突帯を有する。突帯の形状は、両者とも断面は三角形であり、調整はヘラ刻みによる調整である。3は頭部で段をもつ。3個体とも頭部から口唇部にかけて緩やかに外反していく器形をしている。

4・5は壺形土器の肩部で、両者とも一条の突帯を有する。4の突帯は指オサエであり、5の突帯の調整は布目刻みである。6は菱形土器の脚部である。7は長頸壺の口縁部で内外面ともにミガキによる調整である。

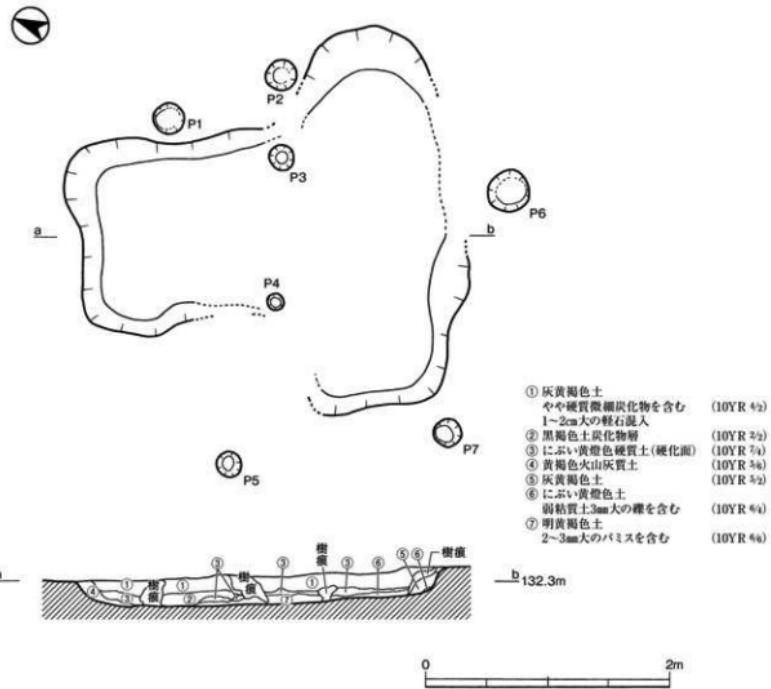


- ① 暗オリーブ褐色・池田・アカホヤバミス混じる (2.5Y 3/3)
- ② 明褐色・アカホヤバミス・埋土③が混ざる (硬化面) (7.5YR 3/6)
- ③ 暗褐色・アカホヤバミス混じる・Nc層がにごった感じ (7.5YR 3/2)
- ④ 黒褐色・池田バジス混じる (10YR 2/1)
- ⑤ 黒褐色・アカホヤ・池田バミス混じる 岩化物も含む (10YR 3/4)
- ⑥ ③と同じ
- ⑦ にがい黄褐色・アカホヤバミス・炭化物混じる (10YR 4/2)

第100図 25号竪穴住居跡

25号竪穴住居跡 (第100図)

D-17区、Ⅲa層で検出された。平面形は、長軸約300cm×短軸約260cmの不定形である。Ⅲ層上面で埋土の色の違いが確認され、掘り下げを行った。住居の中央部を農業用水のパイプが東西方向に埋設されており、調査することはできなかった。この農業用水パイプを挟む形で、南側にも色の違う不定形のプランが検出された。西側は、調査区外のため調査することができず、完全なプランは検出されなかった。北側、南側のプランを掘り下げていくと、この住居の床面と考えられる硬化面が明瞭に残存していた。北側と南側の床面のレベルがほぼ同じであるので、同一の竪穴住居跡であると考えられる。この住居は、南側と西側に間仕切りがあることが確認できた。2基のピットが検出された。形状は、楕円形で平面形はほぼ同じである。ピット間の距離は約120cmである。農業用水パイプで削平を受けてピットの全体は検出できなかったため、この住居に伴う柱穴であるかどうかは不明である。



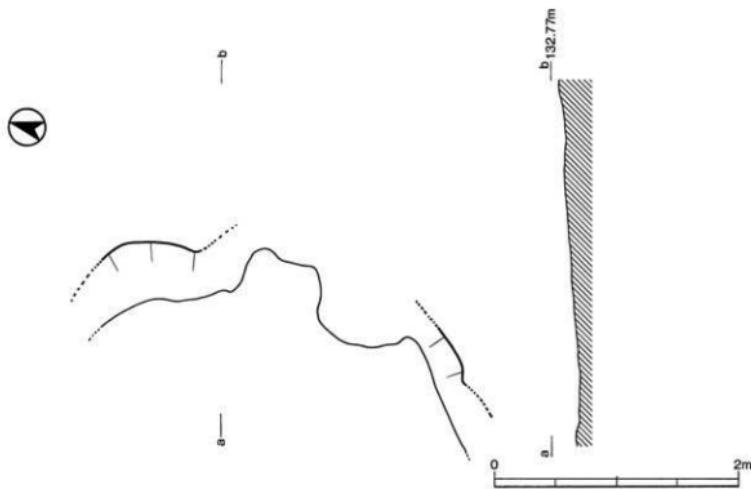
第101図 26号竪穴住居跡

26号竪穴住居跡 (第101図)

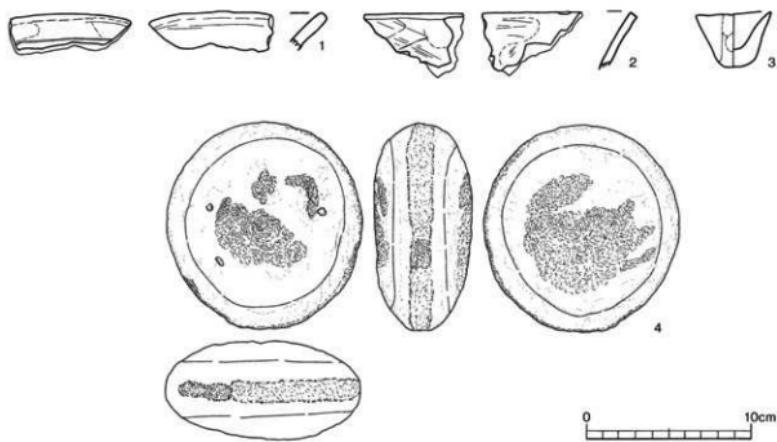
C-18区、Ⅲa層で検出した。長軸約310cm×短軸約146cmのT字形のプランを呈する。南側と西側の一部の上部が削平されていたが、住居の立ち上がりははっきり確認することができた。検出面から床面までの深さは約26cmである。この住居からピットを7基検出した。これらのピットはやや直線上に並ぶので住居の柱穴に伴うものであると考える。

27号住居竪穴住居跡 (第102図)

B-19区、Ⅲa層で検出した。埋土の色の違いや、付近の遺構の検出状況から、竪穴住居の存在を想定して掘り下げを行った。人為的な掘り込みが確認でき、なおかつ硬化面を検出した。形状は、不定形で一部しか残存していないが、周囲の遺構の検出状況や、この遺構が硬化面をもつことから、竪穴住居と判断した。この住居から、成川式土器の土器片や石器が出土し、4点を図化した。



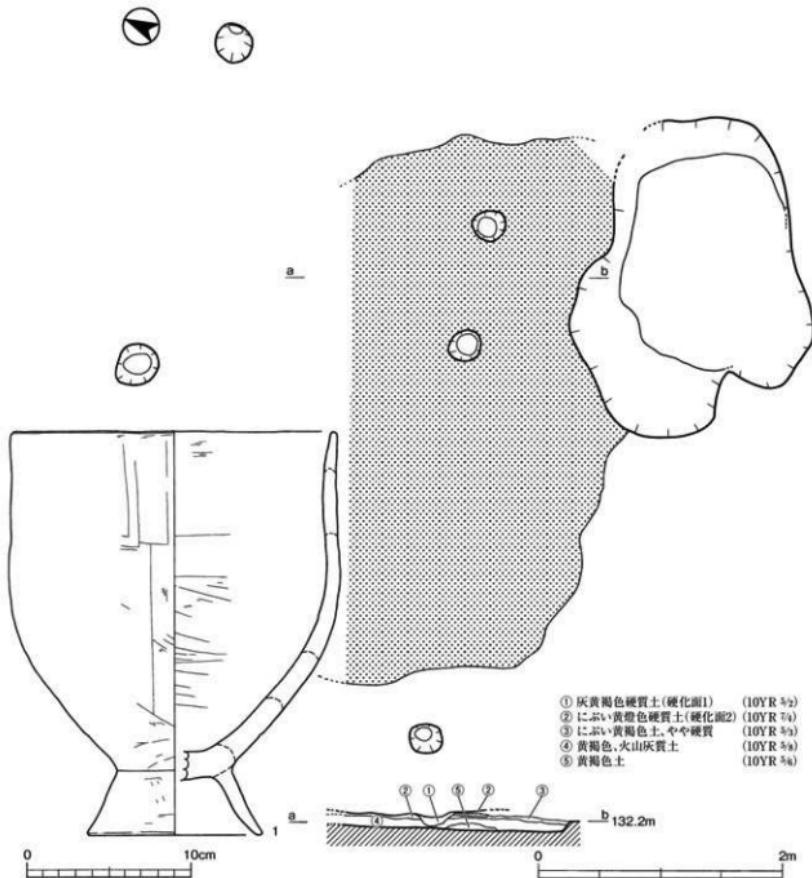
第102図 27号竪穴住居跡



第103図 27号竪穴住居跡出土遺物

27号竪穴住居跡出土遺物(第103図 1~4)

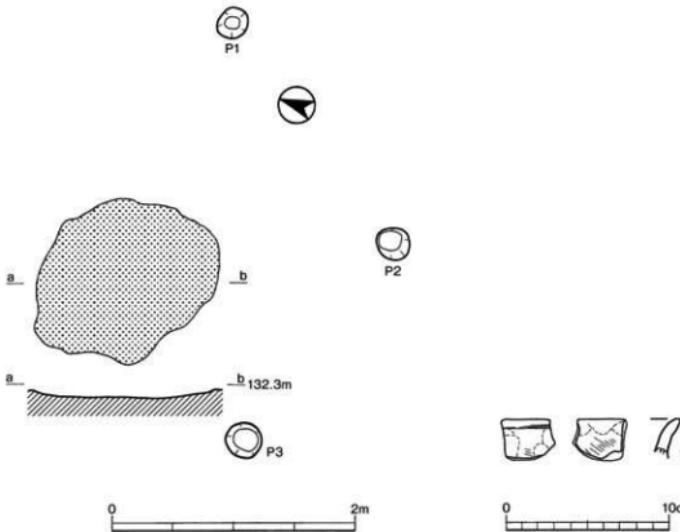
1・2は壺形土器の口縁部である。口唇部はどちらも平坦になるものである。器形は、口唇部がやや外反していくタイプであると思われる。3はミニチュア土器であり、手捏技法で製作されている。4は円盤を使用した磨石・敲石で、断面形は梢円である。表面全体に磨面が確認でき、表面及び側面部に敲打面も確認できる。



第104図 28号竪穴住居跡

28号竪穴住居跡（第104図）

C-19区、Ⅲa層で検出した。埋土の色の違いや付近の遺構の検出状況から、竪穴住居の存在を想定して掘り下げを行った。上部は削平を受けていたが、硬化面を検出することができた。形状は不定形で一部しか残存していないが、周囲の遺構の検出状況や、この遺構が硬化面をもつことから竪穴住居と判断した。この住居の南側には、長軸約260cm×短軸約180cmの梢円形を呈する土坑がある。また、5基のピットを検出した。このピットは、住居の柱穴に伴うものであるかどうかは不明である。この住居から成川式土器の土器片が出土し、接合作業を経て1点を図化した。



第106図 29号竪穴住居跡

第107図 29号竪穴住居跡出土遺物

28号竪穴住居跡出土遺物(第105図 1)

1は壺形土器の完形である。胴部へ口縁部に向かってやや直立する器形である。

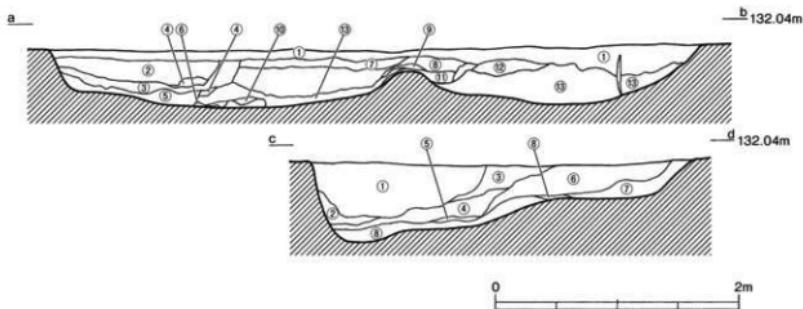
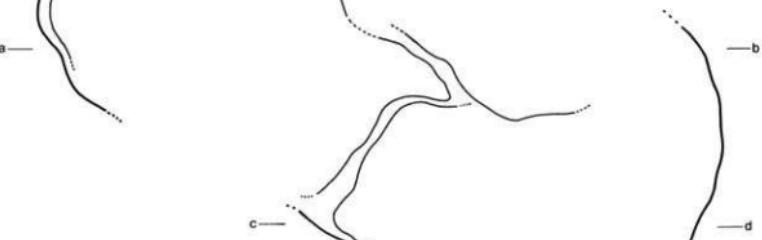
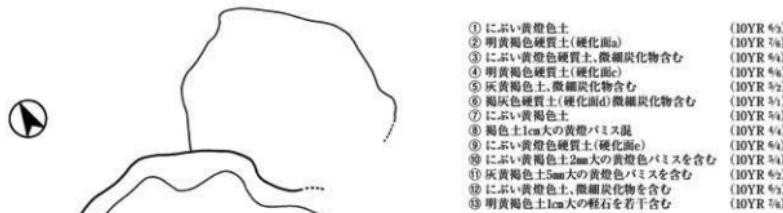
29号竪穴住居跡(第106図)

C—19・20区、IIIa層で検出した。埋土の色の違いがみられ、周囲の遺構検出状況から竪穴住居の存在を想定して掘り下げを行った。上部は削平を受けていたが、床面である硬化面を検出することができた。したがって、ここではこの遺構を竪穴住居として報告する。形状は、長軸約150cm×短軸約120cmの楕円形で、床面のみの検出である。この住居の周囲で、3基のピットが検出された。これらのピットの形状は円形であり、それぞれの距離はP1→P2が約220cm、P2→P3が約200cm、P1→P3が約340cmである。配列は、3基を結んだ線は、限りなく二等辺三角形に近い形狀を成す。周囲の竪穴住居からも、類似したピットを検出しており、これらのことからこれらのピットは、この住居の柱穴に伴うものであろうと考えられる。

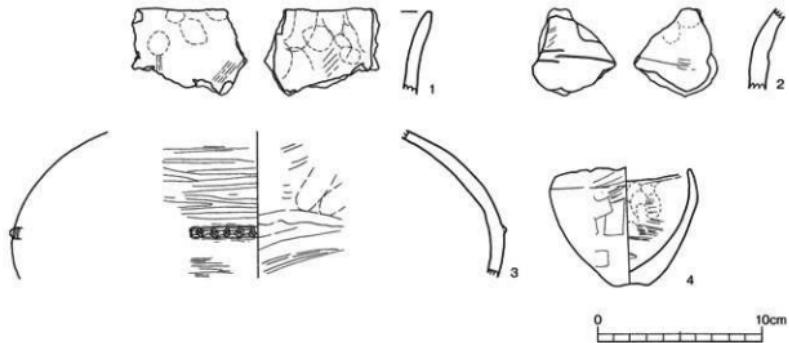
出土遺物は接合作業等を経て1点を図化した。

29号竪穴住居跡出土遺物(第107図 1)

1は壺形土器の口縁部である。口縁部外面に明瞭な段がつく。



第108図 30号竪穴住居跡



第109図 30号竪穴住居跡出土遺物

30号竪穴住居跡(第108図)

A・B-20区、IIIa層で検出した。埋土の色の違いや付近の遺構の検出状況から、竪穴住居の存在を想定して掘り下げを行った。上部は削平を受けていたが、この住居の床面と思われる硬化面を検出することができた。形状は不定形で一部しか残存していないが、周囲の遺構の検出状況や、中央部に人為的な掘り込みを確認することができ、硬化面をもつことから、竪穴住居と判断した。硬化面の広がりの状況から、複数の竪穴住居が立地している可能性も考えられる。

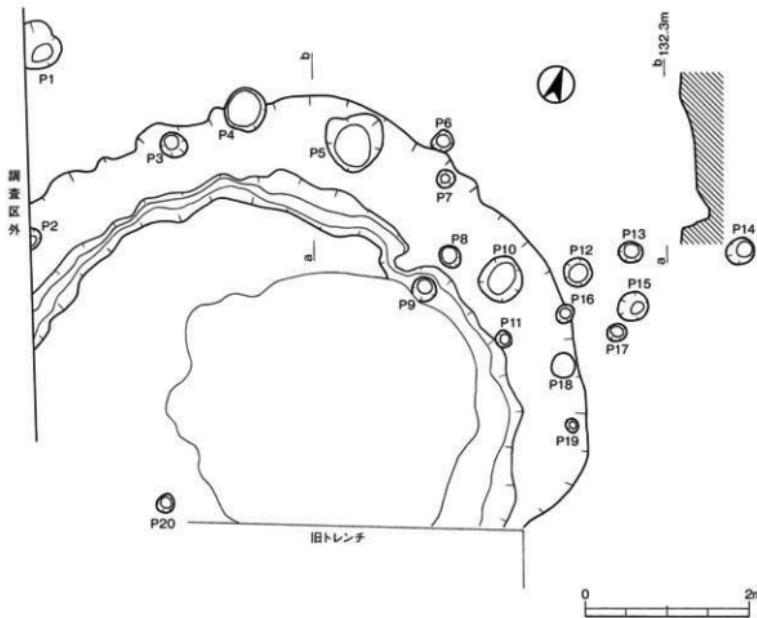
出土遺物は、壺形土器や壺形土器が出土し、接合作業等を経て4点を図化した。

30号竪穴住居跡出土遺物(第109図 1~4)

1・2は壺形土器の口縁部～頸部である。1の口唇部は舌状である。2は壺形土器の頸部である。頸部で内側に縮まり、口縁部にかけて外反するものである。3は壺形土器である。器面調整は外面に幅の短い突帯を有し、突帯には布刻みを施している。外面はミガキによる調整で、内面は丁寧なナデによる調整である。4はミニチュア土器の完形である。何かの飲用器として使用されていたものではないかと考えられる。

第26表 24号竪穴住居跡出土遺物観察表

探査	住居 NO	番号	器種	部位	口径 底径 器高			調整・文様		色調		胎土	備考
					cm	cm	cm	外面	内面	外面	内面		
99	24	1	壺	口縁～胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	暗赤褐色	明赤褐色	石英、長石、角閃石	—
		2	壺	口縁～頸部	—	—	—	ナデ	ナデ	暗赤褐色	石英、長石、角閃石	—	—
		3	壺	口縁～頸部	—	—	—	ナデ	ナデ	暗赤褐色	石英、長石、角閃石	—	—
		4	壺	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	暗赤褐色	赤褐色	石英、長石、角閃石	—
		5	壺	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	に少し赤褐色	に少し赤褐色	石英、長石、角閃石	布目到着帯
		6	壺	脚部	—	62	—	ナデ	ナデ	明赤褐色	石英、長石、角閃石	—	—
		7	壺	口～頸部	19.4	—	—	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	石英、長石、角閃石	—



第110図 31号竪穴住居跡

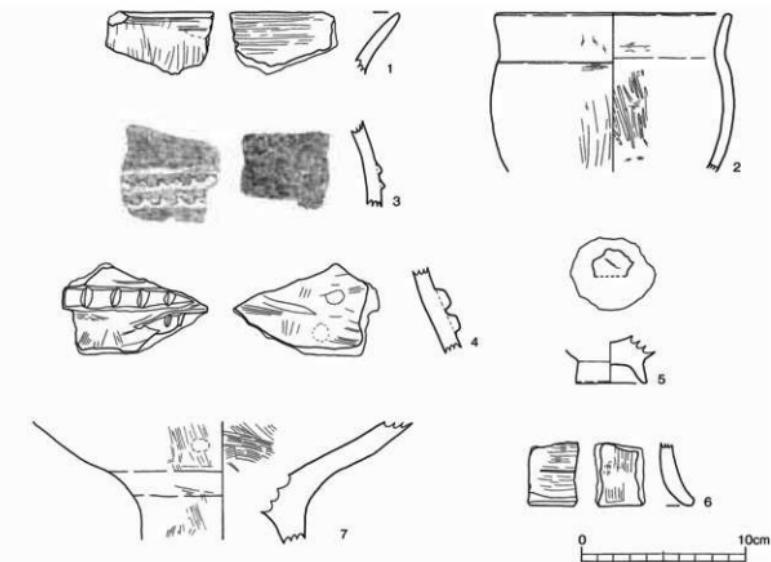
31号竪穴住居跡（第110図）

C・D-20区、IIIa層で検出した。埋土の色の違いや周囲の遺構検出の状況から、竪穴住居の存在を想定して掘り下げた。上部は削平を受けていたが、硬化面を検出することができた。南側は円形周溝2号に切られている。また、円形周溝2号のさらに南側は、確認調査時のトレンチによって切られている。残存する形状は、長軸約660cm×短軸約504cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは、約38cmを測る。この住居の中及び隣接地から合計20基のピットを検出した。これらのピットは、この住居の柱穴に伴うものかどうかは不明である。

出土遺物は接合作業等を経て7点を図化した。

31号竪穴住居跡出土遺物（第111図 1～7）

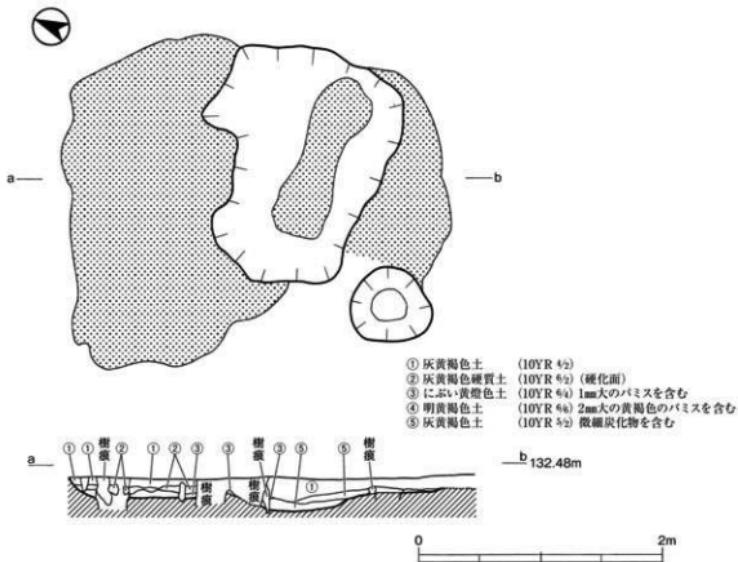
1は甕形土器の口縁部である。2は甕形土器の口縁部～胴部である。口唇部は、1・2ともに舌状である。2の器形は、頸部で内側にしまりその後口縁部にかけてやや外反している。頸部に、明瞭な稜をもつタイプである。3・4は壺形土器の肩部である。両者とも二条の突帯を有する。突帯の調整は、4は断面が四角形で3の断面は三角形を呈する。突帯はどちらもヘラによる刻みである。5・6は甕形土器の脚部である。7は高環の底部である。



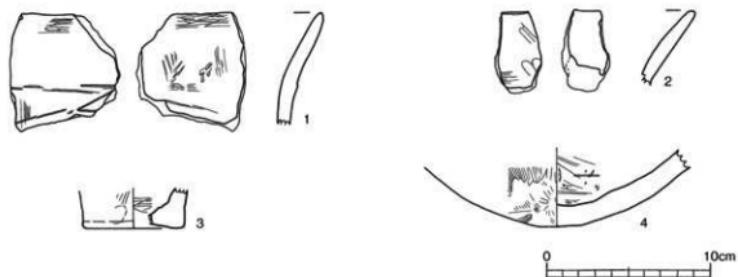
第111図 31号竪穴住居跡出土遺物

第27表 27~31号竪穴住居跡出土遺物観察表

探査	住居 NO	番号	器種	部位	口径 直径 基高			調整・文様		色調		油土	備考
					cm	cm	cm	外面	内面	外面	内面		
					—	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	石英、長石、角閃石	—
103	27	1	便	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	石英、長石、角閃石	—
		2	便	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	石英、長石、角閃石	—
		3	ミニチュア	実形	4.5	1	3.5	ナデ	ナデ	橙	橙	石英、長石、角閃石	—
105	28	1	便	実形	20	10.7	24.7	ハケメ	ナデ	黒褐色	暗赤褐色	石英、長石、角閃石	—
107	29	1	便	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	橙	にぶい赤褐色	長石、角閃石	—
109	30	1	便	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	黒褐色	石英、長石、角閃石	—	
		2	便	腰一側部	—	—	—	ナデ	ナデ	黒褐色	橙	石英、長石、角閃石	—
		3	香	側部	—	—	—	ミワキ	ナデ	赤褐色	にぶい赤褐色	石英、長石、角閃石	—
		4	ミニチュア	実形	8.4	2.1	7.3	手捏	指オサエ	赤褐色	明赤褐色	石英	—
111	31	1	便	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	黒褐色	橙	石英、長石、角閃石	—
		2	便	口縁一側部	14.5	—	—	ケズリ、ナデ	ハケメ、ナデ	黒褐色	赤褐色	石英	保村産
		3	香	側部	—	—	—	ケズリ、ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	石英	—
		4	香	側部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	明赤褐色	石英、長石、角閃石	—
		5	便	底盤	—	4.3	—	工具ナデ	ナデ	橙	明赤褐色	石英、長石、角閃石	—
		6	便	側部	—	—	—	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	石英、長石、角閃石	—
		7	盖坪	片部	—	—	—	工具ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	明赤褐色	石英、長石、角閃石	—
探査	住居 NO	番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量		備考			
					cm	cm	cm	g	g	g	g		
103	27	4	磨石・敲石	緑泥岩	12.7	12.1	6	977	—				



第112図 32号竪穴住居跡



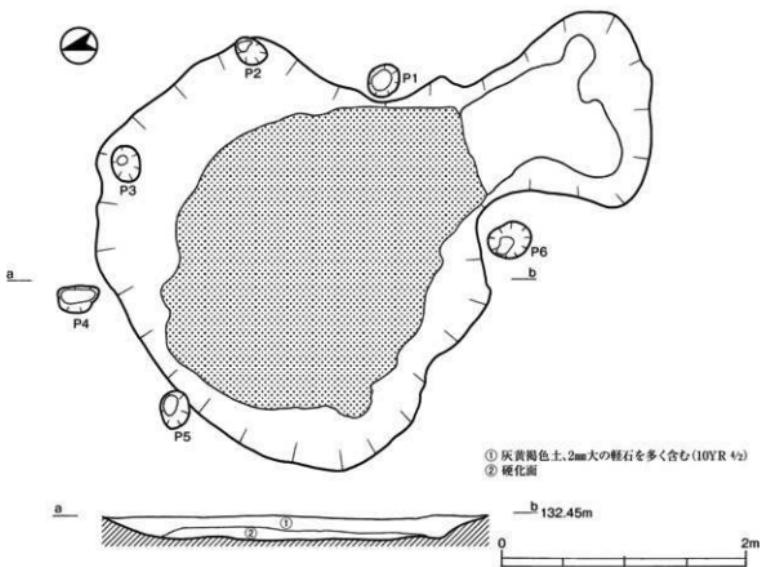
第113図 32号竪穴住居跡出土遺物

32号竪穴住居跡 (第112図)

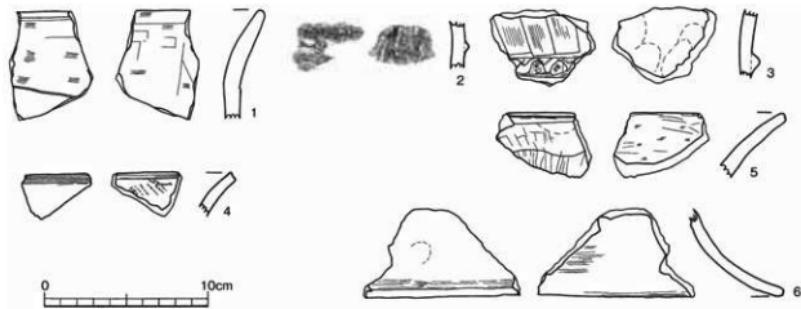
B-20・21区、Ⅲa層で検出した。形状は長軸約314cm×短軸約192cmの不定形で検出面からの深さは約28cmを測る。人為的な掘り込み部と硬化面をもつことから、竪穴住居と判断した。この住居の中央部には、もう一段掘り込まれている部分を確認することができる。この住居から16点の遺物が出土し、接合作業を経て4点を図化した。

32号竪穴住居跡出土遺物 (第113図 1~4)

1・2は壺形土器の口縁部である。口唇部は舌状になり、器形は口唇部がやや外側に開く。3は壺形土器の底部である。4は壺形土器の底部である。底部外面は球状になっている。



第114図 33号竪穴住居跡



第115図 33号竪穴住居跡出土遺物

33号竪穴住居跡 (第114図)

B-21区、Ⅲa層で検出された。形状は長軸約480cm×短軸約358cmの不定形であり、南側に張り出しをもつ住居である。検出面から床面までの深さは約20cmである。埋土観察ベルトを設定してベルトを残しながら掘り下げていった。埋土を掘り下げていくと、この住居の床面と思われる硬化面が明瞭に残存していた。住居の壁面及びその周辺から6基のピットが検出された。それぞれのピット間の距離は、P1→P2、P3→P4、P4→P5が約120cmでP1→P6が約160cm、P5→P6が約300cmである。ピットの配列も規則的に並んでいて、意図的である。このようなことから、これらのピットはこの住居に伴う柱穴の跡ではないかと考えられる。

33号竪穴住居跡出土遺物(第115図 1~6)

1は壺形土器の口縁部～頸部である。頸部で稜をもち口唇部にかけて外側に開くタイプである。2・3は壺形土器の肩部であり、両方とも突帶を有し、布目刻みの調整がある。4は壺形土器の口縁部で、口縁端部の作りがしっかりしている。調整は内外面ともナデで整形されている。5は高坏の坏部で報告するが、鉢の口縁部の可能性もある。口唇部のつくりはしっかりしており、頸部から口縁部にかけてハケメによる調整がほどこされている。6は壺形土器の蓋である。口縁端部の内面にススが付着しており、蓋と判断した。

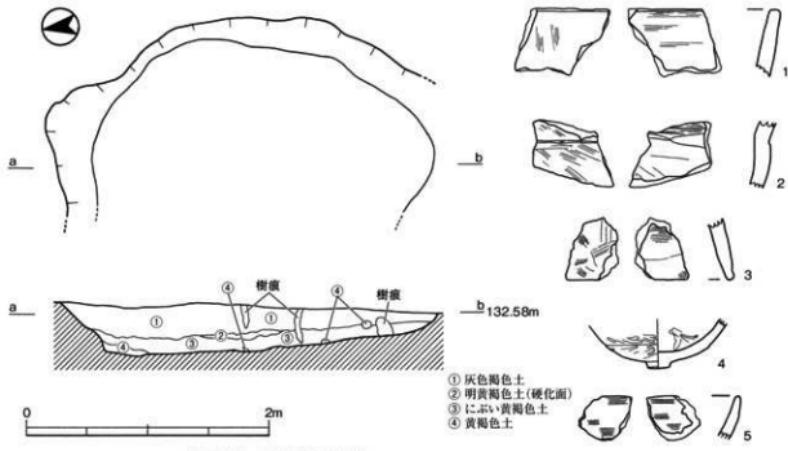
34号竪穴住居跡(第116図)

A・B-21区、Ⅲa層で検出された。平面形は長軸約312cm×短軸約162cmの形状は不定形である。西側は落ち込みがあり全体のプランを確認することはできなかった。検出面から床面までの深さは、約40cmである。東西方向に埋土観察ベルトを設定して掘り下げを行った。埋土を掘り下げていくと、この住居の床面と思われる硬化面が明瞭に残存していた。この住居から検出されたピットはなかった。

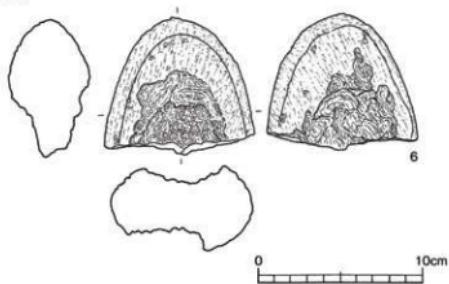
壺形土器や壺形土器等の小片が出土し、接合作業等を経て6点を図化した。

第28表 32~34号竪穴住居跡出土遺物観察表

埠区	住居 NO	番号	器種	部位	口径			底径			高さ			調整・文様		色調			胎土	備考
					cm	cm	cm	外側	内面	外側	内面									
113	32	1	壺	口縁部	-	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	開	開	開	開	石英、黄石、角閃石	-	
		2	壺	口縁部	-	-	-	-	-	-	ミガキ	ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	石英	-	
		3	壺	底部	-	-	5.8	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	石英、黄石	-	
		4	壺	底部	-	-	-	-	-	-	ミガキ・ナデ	ナデ	ナデ	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	明赤褐色	-	
115	33	1	壺	口縁～頸部	-	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	石英、黄石、角閃石	-	
		2	壺	肩部	-	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	石英	布目刻突等	
		3	壺	肩部	-	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	暗	暗	暗	暗	黄石、角閃石	布目刻突等	
		4	壺	口縁部	-	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	にじい黄褐色	にじい黄褐色	にじい黄褐色	にじい黄褐色	石英、黄石、角閃石	-	
		5	高坏	片部	-	-	-	-	-	-	ハケメ	ナデ	ナデ	にじい暗	にじい暗	にじい暗	にじい暗	石英、黄石、角閃石	-	
		6	壺	蓋	-	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	黄石、角閃石	-	
117	34	1	壺	口縁部	-	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	石英	-	
		2	壺	頸部	-	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	黄石	-	
		3	壺	頸部	-	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	石英	-	
		4	小型丸底壺	底部	-	-	-	-	-	-	ミガキ	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	石英	-	
		5	小型壺	口縁部	-	-	-	-	-	-	ミガキ	ミガキ	ミガキ	暗	暗	暗	暗	石英	-	
		6	石	石材	最大員			最大幅			最大厚			重量		備考				
117	34	6	軽石製品	軽石	8.4	9.2	5.1	8.4	9.2	5.1	113.29	113.29	113.29		g	-				



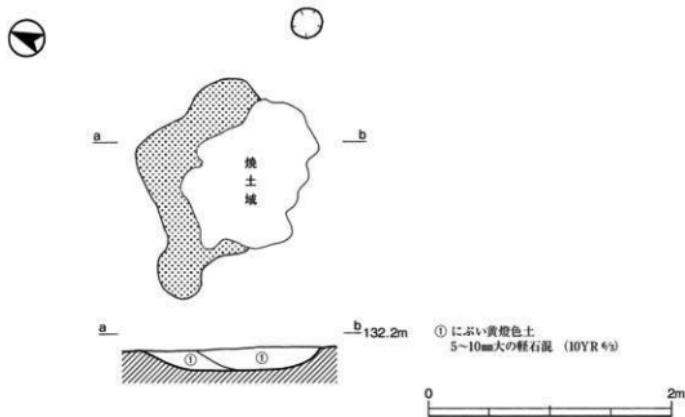
第116図 34号竪穴住居跡



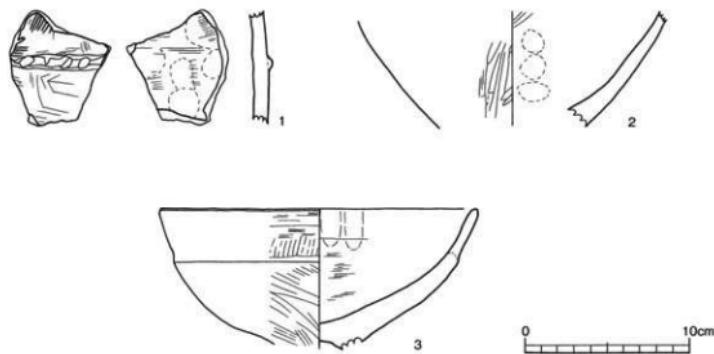
第117図 34号竪穴住居跡出土遺物

34号竪穴住居跡出土遺物 (第117図 1~6)

1は壺形土器の口縁部である。口唇部の作りは口縁端部をまっすぐにナデて整形している。この器形は口縁部がやや直立するものであろうと考える。2は壺形土器の頸部から肩部にかけてである。肩部に一段稜をもつタイプである。3は壺形土器の脚部であり、4は小型丸底壺の底部である。底部に突起物を有する。5は小型の壺の口縁部であり内外面ともミガキによる調整がなされている。



第118図 35号竪穴住居跡

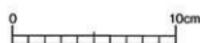
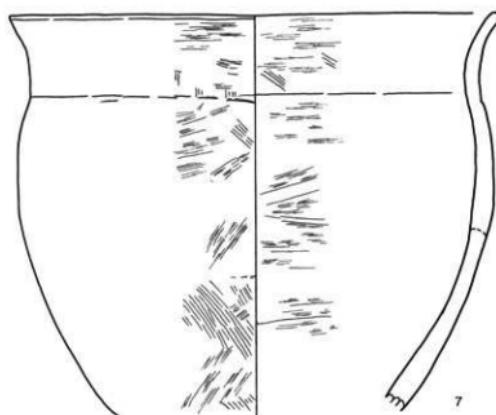
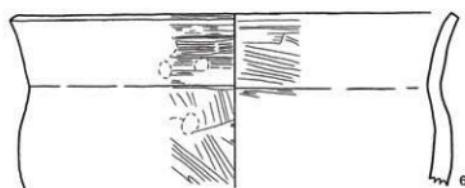
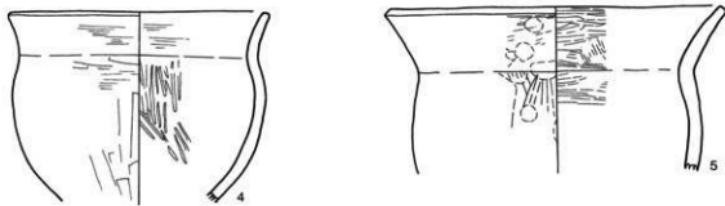


第119図 35号竪穴住居跡出土遺物 (1)

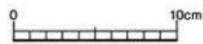
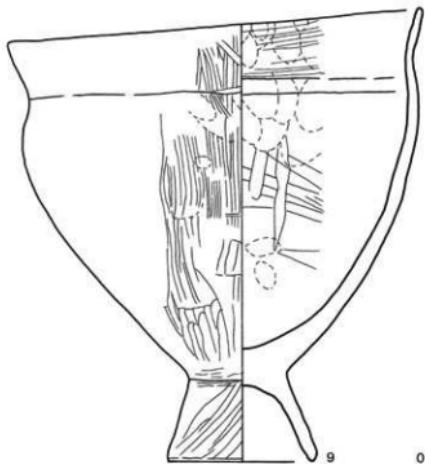
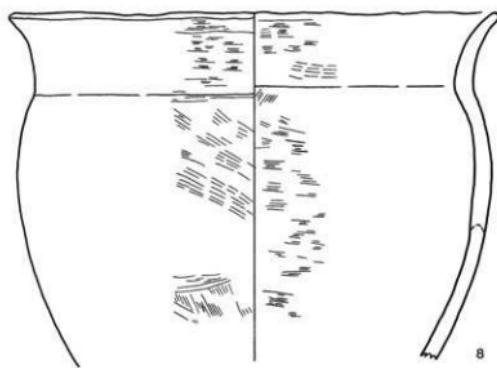
35号竪穴住居跡 (第118図)

C-21区、北側Ⅲa層で検出した。形状は長軸約150cm×短軸約140cmの不定形である。検出面からの床面までの深さは約48cmを測る。掘り下げていくうちに小片遺物が数多く出土してきた。このことから、周辺の構造検出状況は、竪穴住居の可能性を想定し、南北方向にベルトを設定して掘り下げを行った。掘り下げていくうちに床面には、焼土が広がっており硬化面が明瞭に残存していた。

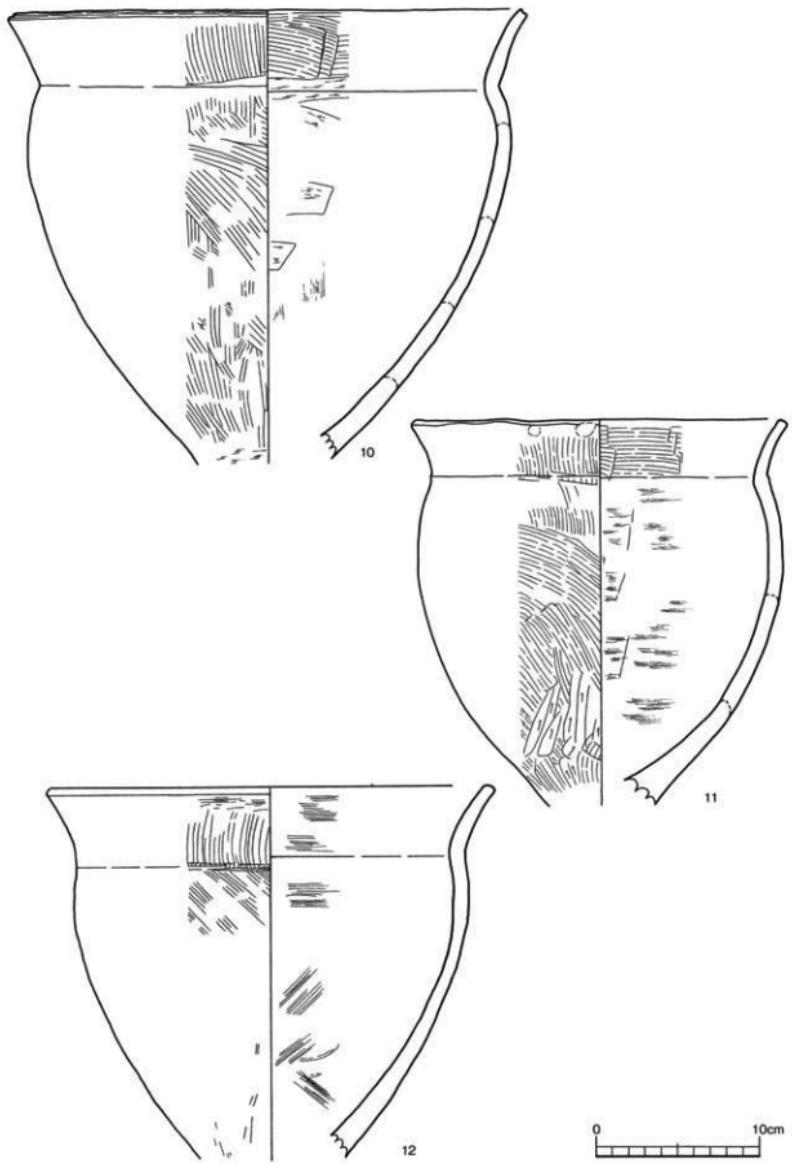
この住居からは、特に変形土器の土器片が多く出土し、接合作業を経て、12点を図化した。



第120図 35号竪穴住居跡出土遺物(2)



第121図 35号竪穴住居跡出土遺物 (3)



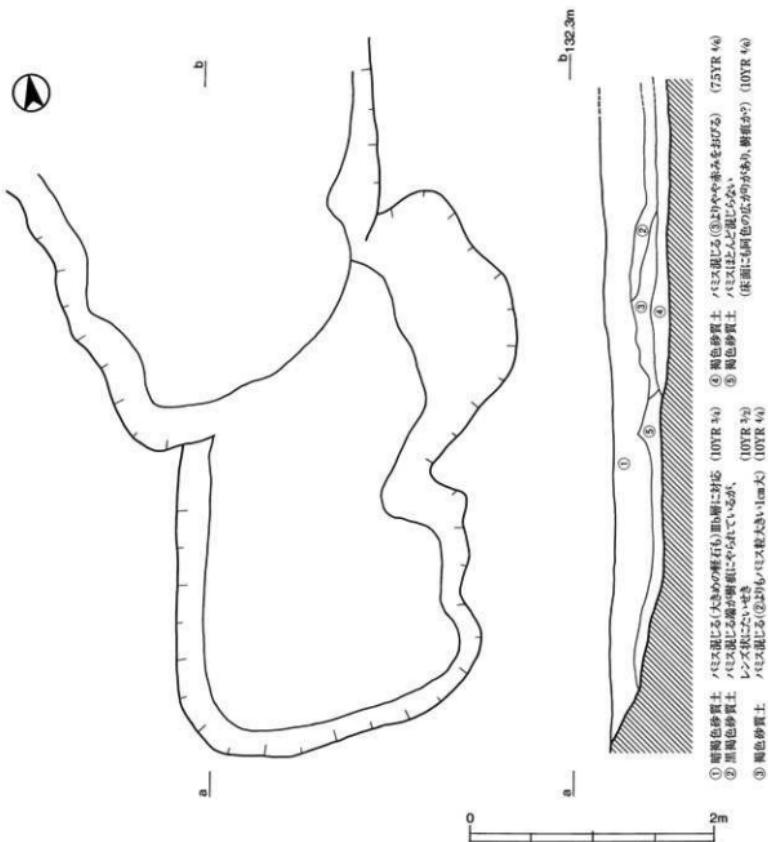
第122図 35号竪穴住居跡出土遺物(4)

35号竪穴住居跡出土遺物 (第119図~122図 1~12)

1は甕形土器の肩部であり、外面に一条の突帯を有する。2は鉢形土器の底部である。外面の調整はミガキであり内面には指オサエがある。3は高坏の坏部である。口縁部から、肩部にかけて明瞭な段をもつ。4~8・10~12は甕形土器の口縁部~胴部である。これらは底部が一部欠損しているもののほぼ完形で、口径が、30cmを越えるやや大型のものである。4~6・10~12の口唇部は平坦になり7・8の口唇部は、舌状になるものである。器形は全て頸部で一度内側に締まり、口唇部にかけて外反していく形をしている。9は甕形土器の完形資料で、外面の調整はすべてハケメによる調整である。

第29表 35・36号竪穴住居跡出土遺物観察表

件名	住居 NO	番号	器種	部位	口径			底径	底高	基高	調整・文様		色調		胎土	備考
					cm	cm	cm				外面	内面	外面	内面		
119	35	1	甕	肩部	—	—	—	ミガキ・ナデ	指オサエ・ナデ	暗褐色	明褐色	白石	—			
		2	鉢	底部	—	—	—	ミガキ	指オサエ・ナデ	赤褐色	黒褐色	角閃石・石英	—			
		3	高坏	坏部	19.4	—	—	ケズリ・ナデ	ナデ・ハケメ	明褐色	暗褐色	角閃石	—			
120	35	4	甕	口縁~胴部	15.8	—	—	ナデ・カズリ	ナデ・カズリ	暗褐色	赤褐色	石英・長石・角閃石	外面に保付箋			
		5	甕	口縁~胴部	20.8	—	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	黒褐色	赤褐色	石英・長石・角閃石	—			
		6	甕	口縁~胴部	27.4	—	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	赤褐色	明褐色	石英・長石・角閃石	—			
121	35	7	甕	口縁~胴部	30	—	—	ナデ・ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	明褐色	にじい赤褐色	白石・角閃石	—			
		8	甕	口縁~胴部	30	—	—	ナデ・ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	黒褐色	にじい赤褐色	石英・長石・角閃石	—			
122	35	9	甕	完形	24.2	6	27.2	ナデ	ナデ	暗褐色	にじい赤褐色	石英・長石・角閃石	—			
		10	甕	口縁~胴部	31.2	—	—	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	黒褐色	暗褐色	石英	—			
		11	甕	口縁~胴部	22.1	—	—	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	赤褐色	暗褐色	石英	—			
		12	甕	口縁~胴部	27.2	—	—	ナデ・ハケメ	ナデ	明褐色	暗褐色	石英	—			
124	36	1	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	黒褐色	にじい赤褐色	石英・長石・角閃石	—			
		2	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	明褐色	暗褐色	石英・長石・角閃石	—			
		3	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	黒褐色	暗褐色	石英・長石	—			
		4	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	仄青褐色	仄青褐色	石英・長石・角閃石	—			
		5	甕	口縁~胴部	17.1	—	—	ナデ	ナデ	暗褐色	暗褐色	石英・長石	—			
		6	甕	胴部	—	—	—	カキアゲ	ナデ	黒褐色	暗褐色	石英・長石・角閃石	—			
		7	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	赤褐色	にじい赤褐色	石英・長石・角閃石	—			
		8	甕	胴部	—	—	—	ナデ・実落	ナデ	黒褐色	暗褐色	石英・長石・角閃石	—			
		9	甕	胴部	—	—	—	ナデ・実落	ナデ	暗褐色	暗褐色	石英・長石・角閃石	—			
		10	甕	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	石英・長石・角閃石	—			
		11	甕	口縁部	—	—	—	ハケメ	ナデ	にじい赤褐色	暗褐色	石英・長石・角閃石	—			
		12	高坏	坏部	—	—	—	丁寧なナデ	丁寧なナデ	暗褐色	暗褐色	石英・長石	—			
		13	高坏	坏部	—	—	—	ミガキ	ミガキ	明褐色	にじい赤褐色	石英・長石・角閃石	—			
		14	鉢	口縁~胴部	13	—	—	ナデ	ナデ	暗褐色	明褐色	石英・長石・角閃石	—			



第123図 36号竪穴住居跡

36号竪穴住居跡 (第123図)

C・D-20・21区、Ⅲa層で検出した。形状は長軸約516cm×短軸約360cmの不定形である。検出面からの床面までの深さは約54cmである。北側を確認トレンチで削平されており全体のプランを確認することができなかった。埋土観察ベルトを南北方向に設定して掘り下げを行った。埋土を掘り下げていくと、この住居の床面と考えられる硬化面が明瞭に残存していた。貼り床は北側から南側で一度途切れ、南側からまた現れてくる。床面のレベルが同じであるので、北側と南側は同一の住居と考えられる。この住居跡からはピットは検出されなかった。

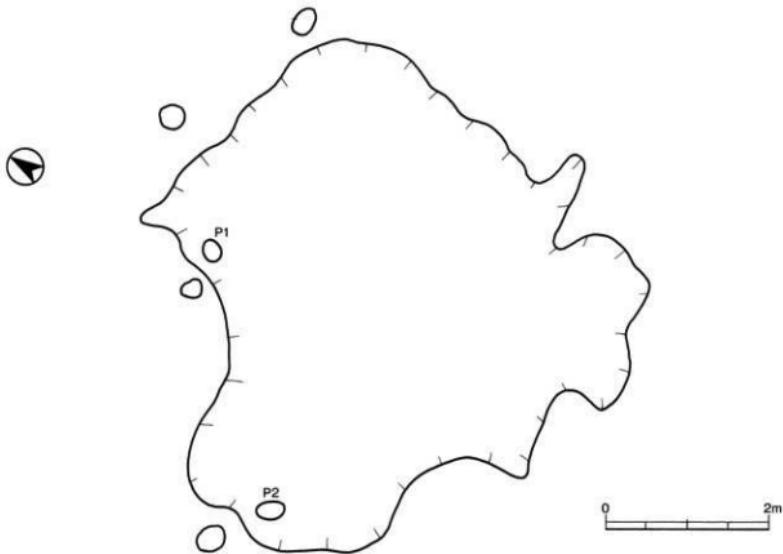
36号竪穴住居跡出土遺物 (第124図 1~14)

1~4は壺形土器の口縁部である。1は口縁端部が平らになるもの、3は口縁端部が舌状になるもので緩やかに外反するものである。2・4は壺形土器の頭部から口縁部である。口縁部は平



第124図 36号竪穴住居跡出土遺物

らで頸部に掻き上げがあり、ゆるやかに外反するものである。5・6は壺形土器の口縁部から胴部である。両者とも肩部のところで、少しくぼんで、その後頸部口縁部と緩やかに外反する器形である。6は肩部で掻き上げがみられる。口縁端部の作りは、両者とも平らなものである。7は壺形土器の口縁部である。内外面はナデ調整されている。8・9は壺形土器の胴部である。両者とも突帯をもつものである。8は断面三角を呈する。突帯の刻みは両者ともヘラ刻みである。10は壺形土器の底部である。12・13は高坏の坏部である。12は内外面ともに丁寧なナデで調整されている。13は底面で屈曲し外側に開いていくタイプのものである。調整は内外面ともミガキである。14は鉢の口縁部～胴部にかけてである。胴部から口縁部にかけて、内窓していく器形である。調整は内外面ともに工具ナデの痕があり、その後その痕をていねいにナデ消してある。



第125図 37号竪穴住居跡

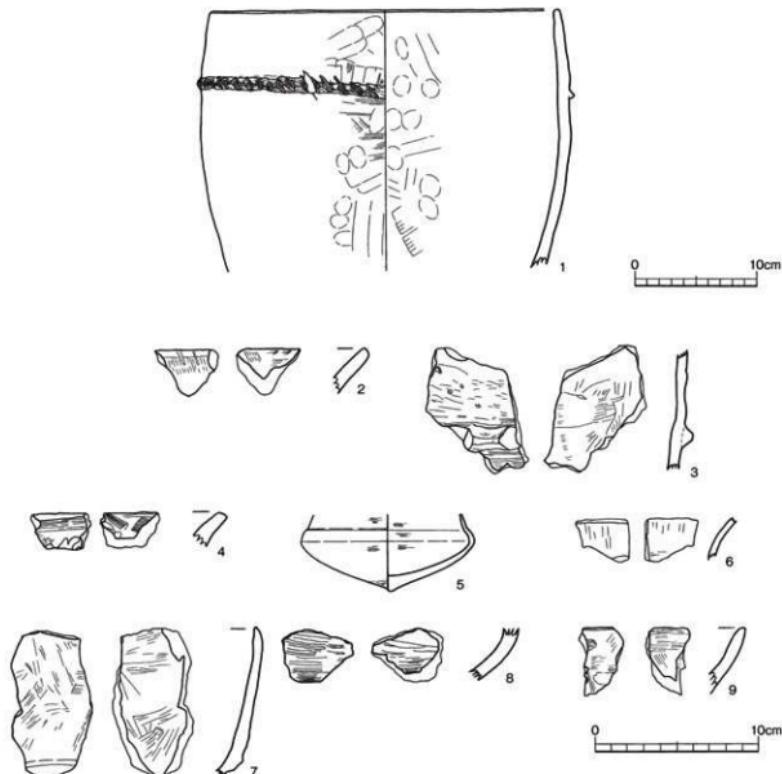
37号竪穴住居跡 (第125図)

A・B-21・22区、Ⅲa層で検出した。形状は長軸約560cm×短軸約520cmの不定形である。Ⅲ層の埋土を掘り下げていくと、この遺構の床面と思われる硬く締まった貼り床が明瞭に残存していた。したがってこの遺構を、竪穴住居跡として報告する。この住居の北側壁面に、ピットが2基検出された。このピットの距離は、P1→P2が約220cmである。また配列は直線上に並んでいる。この周囲からも4基のピットが検出された。

出土遺物は、成川式土器の土器片が出土し、接合作業等を経て、8点を図化した。

37号竪穴住居跡出土遺物 (第126図 1~9)

1は壺形土器の口縁部～胴部である。口縁部から胴部にかけて、やや内弯していく器形をしており、胴部に一条の突帯があり、突帯には布目刻みの調整がある。口唇部は平らで、内外面ともに調整は丁寧なナデである。2は壺形土器の口縁部である。口唇部のつくりは平らである。3は壺形土器の胴部で、一条の突帯がある。3の突帯のつくりは、指つまみで貼り付けてある。内面は頸部付近で一度段がつき、そこからやや外側に立ち上がっていいくものである。4は壺形土器の口縁部である。7は、小型丸底壺である。直立しながら、口唇部がやや内弯していく。飲用器として使用されていたと考えられる。5も小型丸底壺である。底部外面に小さな突起があるのが、確認できる。8は高環の環部である。内外面ともにミガキによる調整で、外面には赤色顔料が塗布されている。9は小型の鉢の口縁部である。



第126図 37号竪穴住居跡出土遺物

第30表 37号竪穴住居跡出土遺物観察表

探査	住居 NO	番号	器種	部位	口径 ca	底径 ca	高さ ca	調整・文様		色調		粘土	備考
								外面	内面	外面	内面		
126	37	1	便	口縁～胴部	29.8	—	—	ナデ	ナデ	褐	明褐色	輝石・石英	有目刻文帶
		2	便	口縁部	—	—	—	丁寧なナデ	丁寧なナデ	明褐色	明褐色	石英	—
		3	便	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	褐	褐	石英	—
		4	便	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	角閃石・石英	—
		5	小型丸底壺	口縁～底部	—	—	—	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	角閃石・石英	—
		6	小型丸底壺	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	褐	褐	石英	—
		7	小型丸底壺	口縁～底部	—	—	—	ナデ	ナデ	褐	褐	石英	—
		8	瓶	口縁部	—	—	—	ミガキ	ミガキ	赤褐色	にじい赤褐色	石英、長石、角閃石	赤色調
		9	小型鉢	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	石英	—

38号竪穴住居跡 (第127図)

B・C-22・23区、Ⅲa層で検出した。形状は長軸約850cm×短軸約675cmの不定形である。検

出面からの床面までの深さは約55cmである。この住居は、この区の周辺で検出された竪穴住居の中では、大型の部類に入るものである。この区は周辺から竪穴住居跡が多数検出されている場所であるので、住居跡を想定して掘り下げを行った。埋土の色の違いを確認し、南北方向と東西方向に埋土観察ベルトを設定して掘り下げていった。この住居の貼り床と思われる硬化面が明瞭に残存していた。また、住居のほぼ中央部分に、土坑のような掘り込み部分を確認することができた。南側には、張り出し部分があることも確認できた。

この住居の中及び周辺からは、32基のビットが検出された。これらのビットのうち、11基のビットが壁面にそって検出された。また、中央部の掘り込み部からも3基のビットが検出された。

壁面から検出されたビットのそれぞれの距離は、P9→P10が約90cm、P10→P11、P11→P12が約120cm、P12→P13、P15→P16、P17→P18、P18→P19が約150cm、P13→P14が約300cm、P16→P17が約180cmである。また、中央掘り込み部に位置するビット30を中心に壁面にあるビットへ線を結ぶと、放射状に結ぶことができ、それぞれの距離は、約300cm～360cmとやや等間隔になる。このようなことから、これらのビットは、この住居に伴う柱穴であると考えられる。また、この住居の周囲から検出されたビット1～8は、住居を取り囲むような配列であり、ビット30から放射状に線を結ぶと約450cm～約480cmとやや等間隔になる。これらのことからこの周囲にあるビットも、この住居の構造上に伴うものであろうと考える。

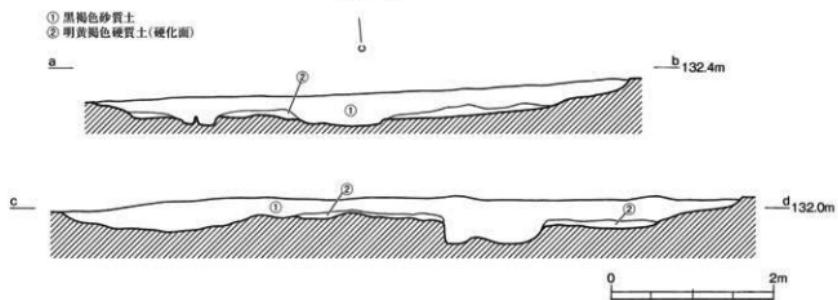
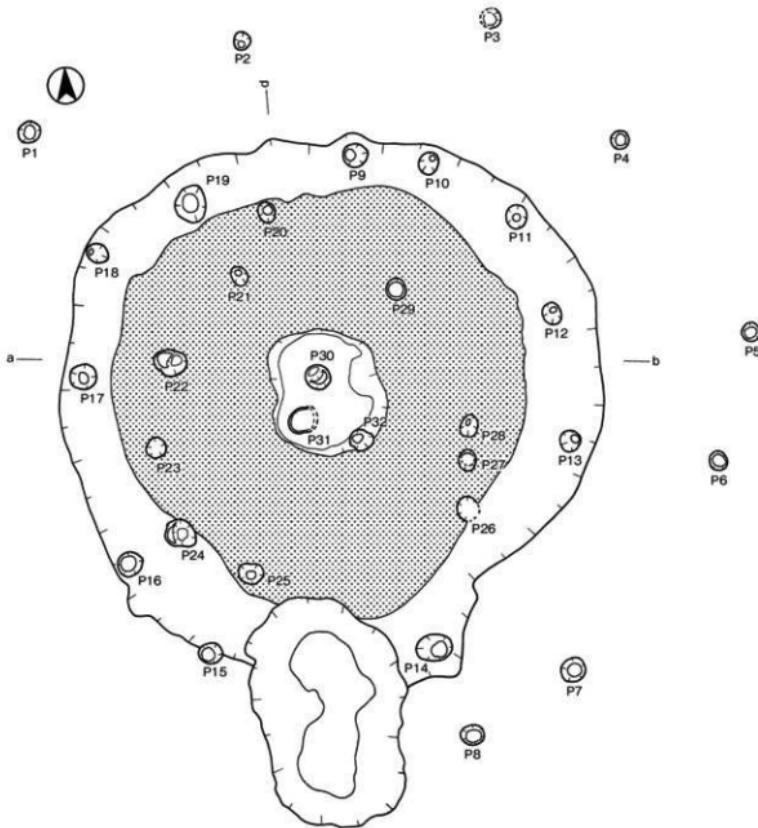
出土遺物は、成川式土器の壺形土器や壺形土器の土器片が多数出土し、接合作業を経て、40点を図化した。

38号竪穴住居跡出土遺物（第128図～132図 1～40）

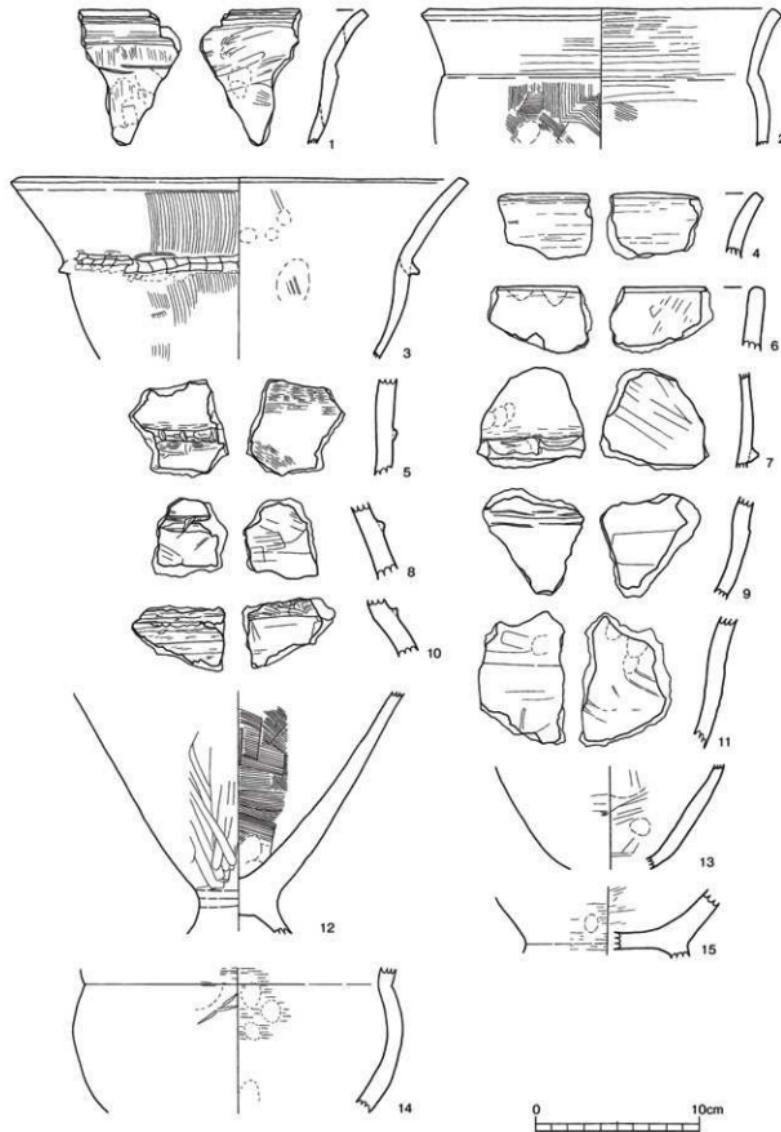
1～3は壺形土器の口縁部～胴部である。3は外面に一条の突帶を有する。2・3ともに、外面にハケメによる調整がある。17は壺形土器の完形である。内外面ともナデで調整している。内面にススが付着しており、煮炊き使用された痕が窺える。外面口唇部の形状は17が舌状で、他はすべて平坦である。器形は頸部で内側に締まり口縁部にかけて外反していく器形である。4・6は壺形土器の口縁部である。6は器壁が厚い。5・7～10は壺形土器の肩部～胴部である。5・7・8・10は一条の突帶を有する。13・25・26は壺形土器である。26は無頸壺の完形である。調整は、丁寧なナデによる調整である。27は小型丸底壺である。丁寧な作りであり器壁は薄い。29は大型の高壺である。壺部外面に暗文が施されている。31も暗文が施されている。32は鉢形土器である。35～38は小型の丸底壺・ミニチュア土器である。飲用器として使用されたものであろう。39は端部が面取りをしてあり土製品として報告する。40は磨石である。表面に磨面が形成されている。

第31表 38号竪穴住居跡出土遺物観察表(1)

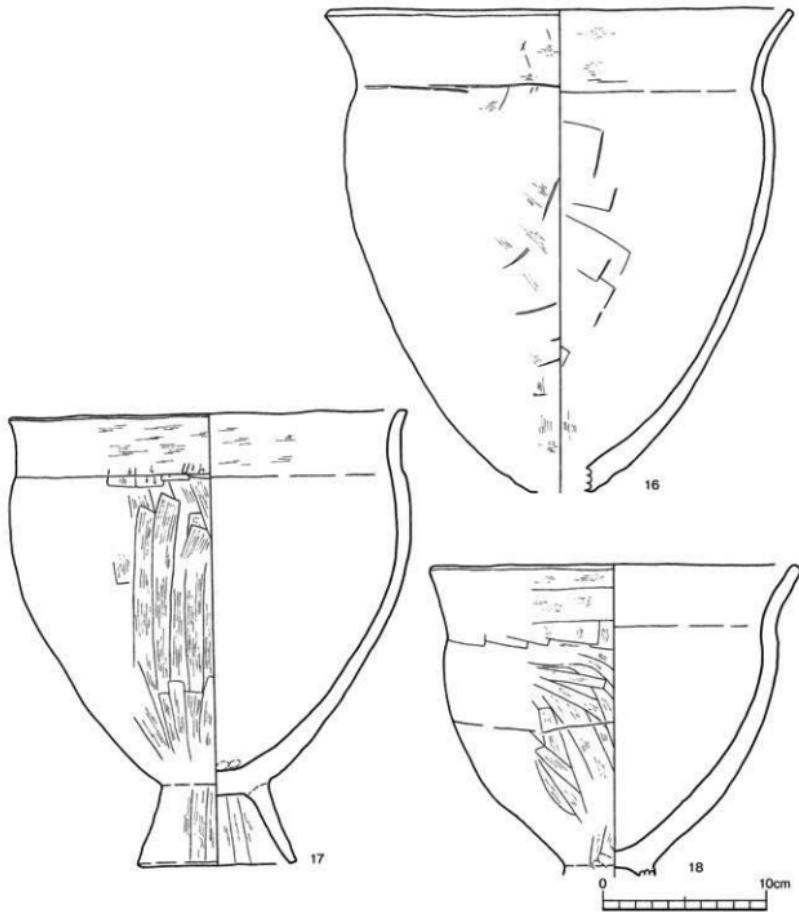
辨認	住居 NO	番号	器種	部位	口径 cm			底径 cm		高さ cm		調整・文様		色調		胎土	備考
					外側	内側	外側	内側	外側	内側	外側	内側	外側	内側			
128	38	1	壺	口縁～胴部	—	—	—	—	ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	—	—	石英	—	
		2	壺	口縁～胴部	22	—	—	—	ハケメ	工具ナデ	黒褐色	褐	石英、長石	—	—	—	
		3	壺	口縁～胴部	28	—	—	—	ハケメ	ナデ	赤褐色	赤褐色	—	—	石英	—	
		4	壺	口縁部	—	—	—	—	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	—	—	石英、長石	—	
		5	壺	胴部	—	—	—	—	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	—	—	石英	—	
		6	壺	口縁部	—	—	—	—	指オサエ、ナデ	ナデ	赤褐色	明赤褐色	—	—	石英	—	
		7	壺	胴部	—	—	—	—	指オサエ、ナデ	ナデ	明赤褐色	赤褐色	—	—	石英	—	



第127図 38号竪穴住居跡



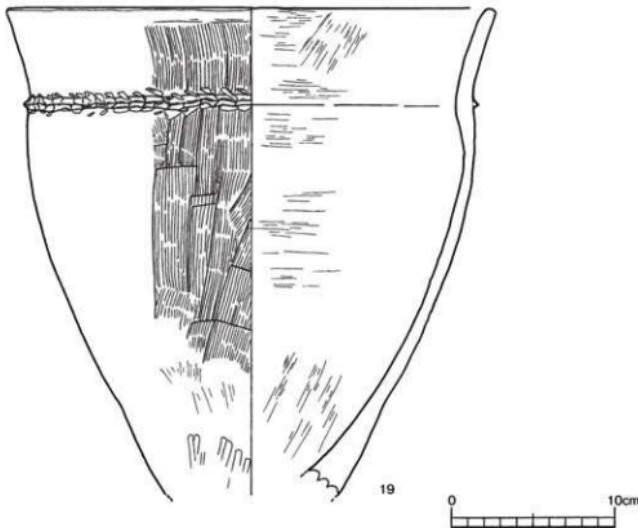
第128図 38号竪穴住居跡出土遺物(1)



第129図 38号竪穴住居跡出土遺物 (2)

第32表 38号竪穴住居跡出土遺物観察表 (2)

件名	住居 NO	番号	器種	部位	口徑			直径	器高	調整・文様		色調		胎土	備考
					外側	内側	外面			外面	内面	外面	内面		
128	38	8	壺	肩~鈍部	—	—	—	ナデ	ナデ	柾	柾	にぶい黄柾	石英、黄石	—	
		9	壺	鈍部	—	—	—	ナデ、工具ナデ	ナデ	柾	柾	柾	柾	長石	—
		10	壺	肩~鈍部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい柾	石英、長石	—		
		11	壺	鈍部	—	—	—	指オサエ、ナデ	指オサエ、ナデ	黒褐	赤褐	柾	柾	石英	—
		12	壺	胸~底部	—	—	—	ミカキ	工具ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	石英、角閃石	石英	—	
		13	壺	鈍部	—	—	—	ナデ	ナデ、ミカキ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	石英	石英	—	
		14	壺	腰~鈍部	—	—	—	ナデ	指オサエ、ナデ	明赤褐	柾	柾	柾	石英	—
		15	壺	腰部	—	—	—	ナデ、指オサエ	ナデ	柾	柾	柾	柾	石英	—

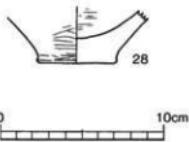
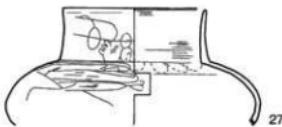
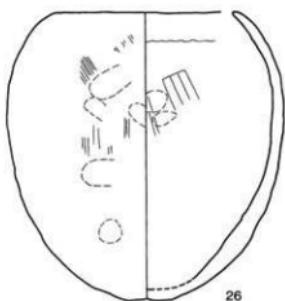
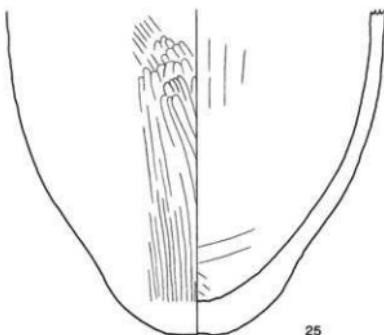
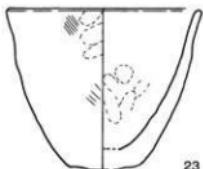
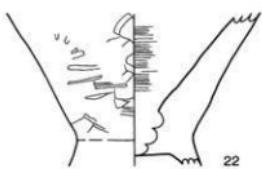
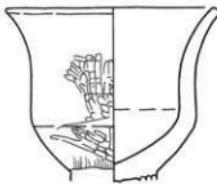
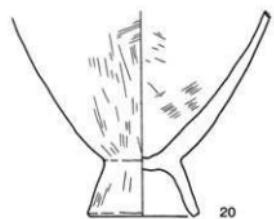


第130図 38号竪穴住居跡出土遺物 (3)

第33表 38号竪穴住居跡出土遺物観察表 (3)

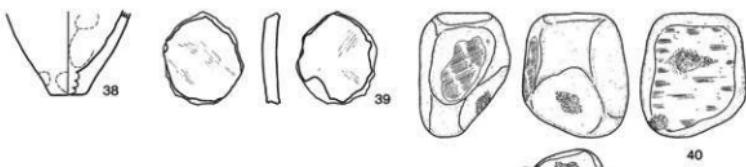
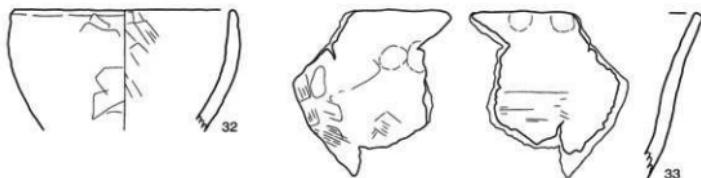
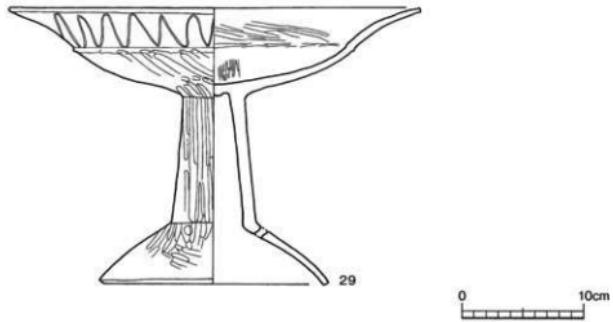
探区	住居 NO	番号	器種	部位	口径 cm	底径 cm	基高 cm	調整・文様		色調 外面	色調 内面	胎土	備考
								外側	内側				
129	16	便	口縁～胴部	28.6	—	—	ナテ	ナテ	明褐色	にじい褐色	石英、長石、角閃石	—	
		便	尖形	24.4	9.8	27	ナテ	ナテ	赤褐色	赤褐色	石英、長石、角閃石	—	
		便	口縁～底部	22.6	—	19	ナテ	ナテ	赤褐色	赤褐色	石英、長石、角閃石	—	
130	19	便	口縁～胴部	30	—	—	ナテ、ケズリ	ナテ	明赤褐色	明赤褐色	石英	—	
		便	胴～脚部	—	8.4	—	ハケメ	ナテ	明赤褐色	明赤褐色	石英	—	
131	20	鉢	口縁～底部	13	—	—	ミガキ	ナテ	明赤褐色	橙	石英	—	
		鉢	脚～底部	—	—	—	ナテ	ナテ	にじい赤褐色	明赤褐色	石英	—	
	21	鉢	尖形	16	5	13.2	ナテ、指オサエ	ナテ、指オサエ	明赤褐色	にじい赤褐色	石英	—	
		鉢	脚部	—	8	—	指オサエ	—	橙	黄褐色	石英、長石、角閃石、霞母	—	
	24	便	脚～底部	—	2.6	—	ミガキ	ナテ	橙	黄褐色	石英	—	
		便	尖形	11	2.8	17.5	ナテ、指オサエ	ナテ、指オサエ	橙	黄褐色	石英	—	
	27	小型丸底壺	口縁～胴部	8.6	—	—	ミガキ	ナテ	橙	黄褐色	石英	—	
		鉢	底部	—	4.5	—	ケズリ後ナテ	ナテ	暗褐色	明赤褐色	石英	—	
132	29	高杯	尖形	16.9	9.3	22.7	ミガキ	ミガキ	赤褐色	にじい褐色	明赤褐色	暗文	
		高杯	器台	—	—	—	ミガキ	ナテ	にじい黄褐色	明赤褐色	石英	—	
	30	高杯	杯	—	—	—	ナテ	ナテ	にじい黄褐色	明赤褐色	石英	暗文	
		鉢	口縁～胴部	13.4	—	—	ナテ	工具ナテ	明赤褐色	明赤褐色	石英	—	
	33	便	口縁	—	—	—	ナテ、指オサエ	ナテ、指オサエ	明赤褐色	明赤褐色	石英	—	
		高杯	底部	—	—	—	ヘラミガキ	ナテ	浅黄褐色	灰白	石英	—	
	34	高杯	尖形	6.3	—	5.2	ナテ	ナテ	にじい黄褐色	にじい黄褐色	石英	—	
		小型丸底壺	尖形	6.5	—	5.2	指オサエ	ナテ	指オサエ	にじい褐色	石英	—	
	36	ミニチュア	尖形	6.4	—	5.9	ナテ、指オサエ	ナテ	指オサエ	指オサエ	石英	—	
		ミニチュア	脚～底部	—	2	—	指オサエ	ナテ	指オサエ	赤褐色	石英	—	
	39	内壁状土製品	—	—	—	—	ナテ	ナテ	深褐色	にじい赤褐色	石英、角閃石	—	

探区	住居 NO	番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量 kg	備考
					cm	cm	cm		
132	38	40	磨石	安山岩	7.6	6.5	5.5	407	—



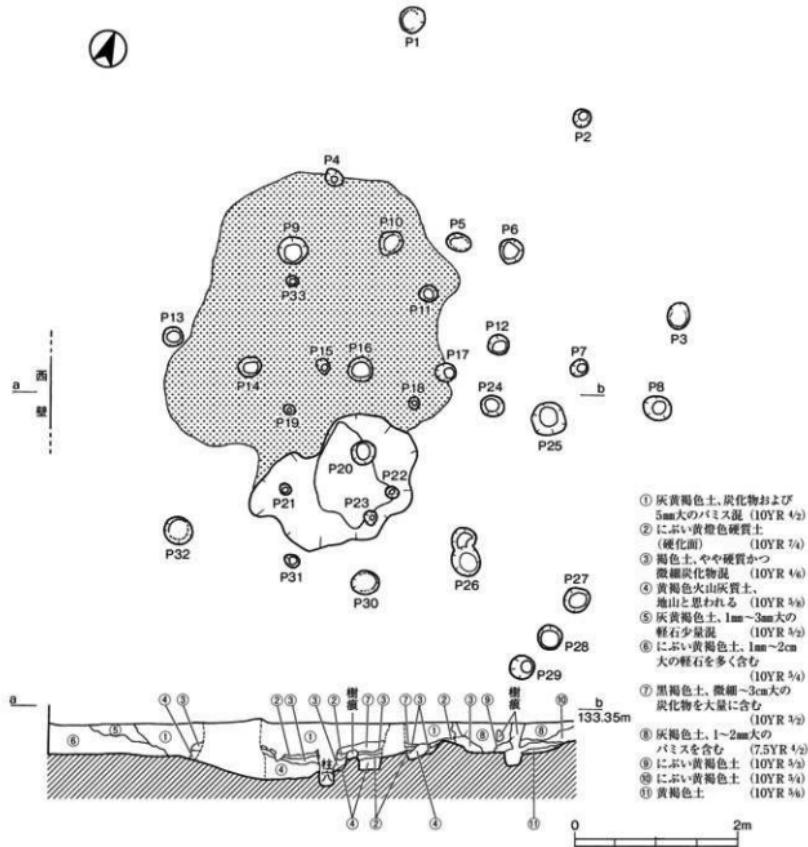
0 10cm

第131図 38号竪穴住居跡出土遺物(4)



0 10cm

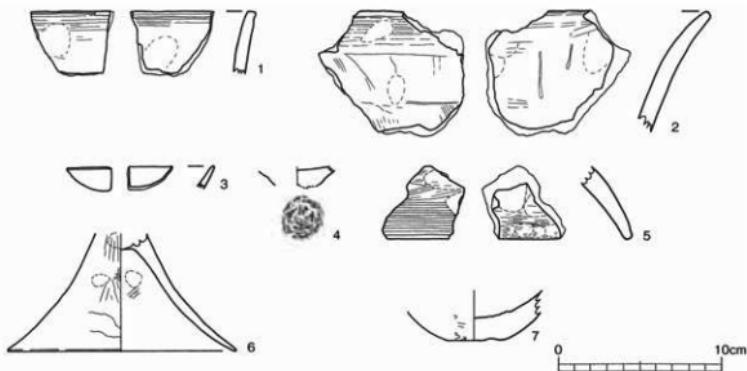
第132図 38号竪穴住居跡出土遺物(5)



第133図 39号竖穴住居跡

39号竖穴住居跡 (第133図)

C・D-21・22区、Ⅲa層で検出した。形状は長軸約458cm×短軸約350cmの不定形を呈する。検出面からの床面までの深さは約70cmを測る。埋土を掘り下げていくと多数のピットが検出された。さらに、掘り下げていくとこの住居の床面と思われる硬化面が明瞭に残存していた。床面からは成川式の土器片が出土した。したがって、この遺構を竖穴住居として報告する。この住居の中とその周辺から、33基のピットが検出された。これらのピットの中で、P1~3・8・27・28・29は弧を描くように配列されており、それぞれの距離は、P1→P2が約230cm、P2→P3、P8→P27が約260cm、P3→P8が約120cm、P27→P28、P28→P29が約60cmとやや等間隔である。また、38号竖穴住居跡で述べた中央部の掘り込みに類似した部分が南側に確認できる。ここに位



第134図 39号竪穴住居跡出土遺物

置しているP20が、先述した「40号竪穴住居跡P30」と酷似している。このP20を中心にP1～3・8・27～29を放射状に結ぶと、約360cm～約220cmとなり、P20→27・P28・29はそれぞれ、同じ約220cmと等距離になる。このようなことから、これらのピットは、この住居の構造に伴う柱穴の可能性が高いと考えられる。

出土遺物は、成川式の土器片が出土し、接合作業を経て5点を図化した。

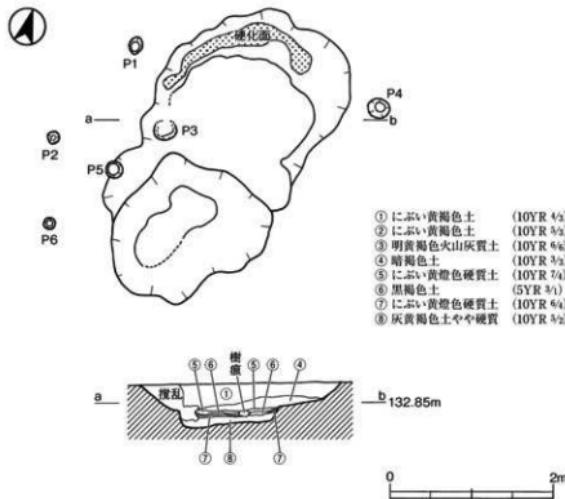
39号竪穴住居跡出土遺物(第134図 1～7)

1・2は壺形土器の口縁部である。1の口唇部は平坦であり、2は舌状である。頸部外側に搔き上げによる調整が施されている。頸部から口縁部にかけてやや外反する器形である。5は蓋である。口縁部内面にスヌが付着している。外面の調整はヘラミガキである。7は壺形土器の底部である。外面の調整は、ミガキである。6は器台の脚部である。器壁は薄く、器面調整は縱方向にハケメが施されており、丁寧である。3は小型丸底壺の口縁部である。

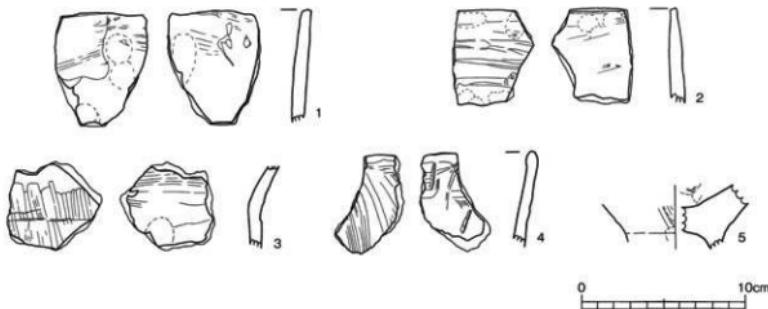
40号竪穴住居跡(第135図)

C・D-22区、IIIa層で検出された。形状は長軸約310cm×短軸約240cmの不定形である。この区は周辺より竪穴住居跡が多数検出されたことから、より慎重に埋土を掘り下げていった。掘り下げ方は、中央に埋土観察ベルトを設定して、中央部分から床面を確認していく。掘り下げていくと、この住居の床面と思われる硬く締まった貼り床が確認できた。この住居の検出面からの床面までの深さは約54cmである。上面は削平され、床面近くで確認することができた。南側に張り出しをもつものであると確認でき、6基のピットが検出された。それぞれのピット間の距離は、P2→P6が約108cm、P2→P5、P5→P6が約90cmと同じか近似値である。また、P2～P4は直線上に並ぶ。このようなことから、これらのピットは、この住居の構造に伴う何かの柱穴である可能性が高いと考える。

この住居の形状は南側に張り出しをもち、多数のピットが存在し、床面付近の形状が39号住居に類似している。このようなことから、38号住居のような形状になるのではないかと推測することができる。



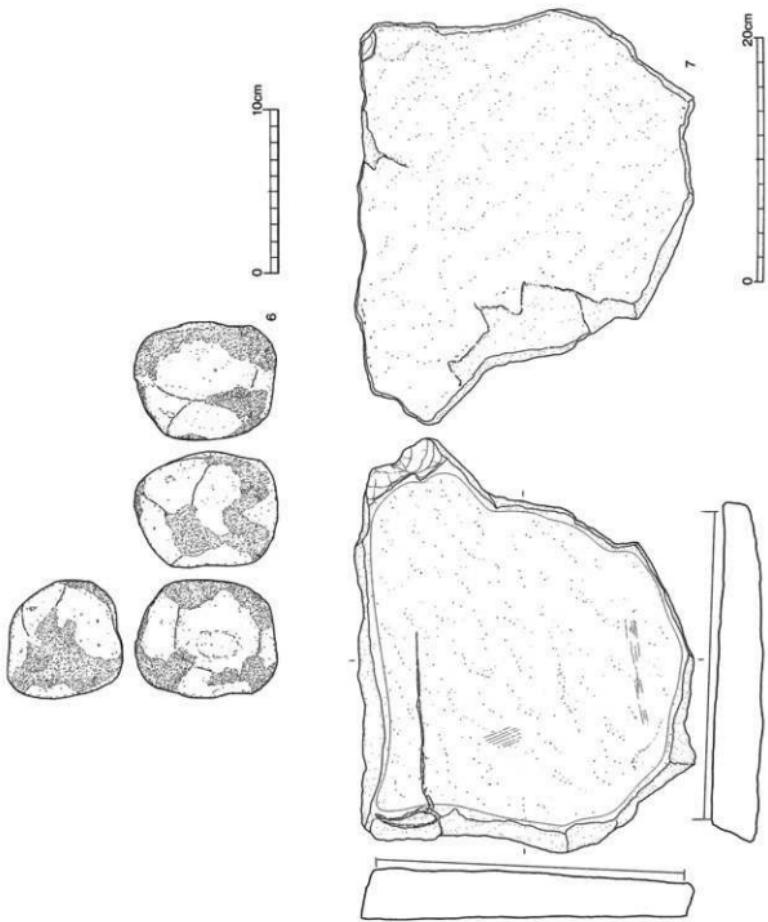
第135図 40号竪穴住居跡



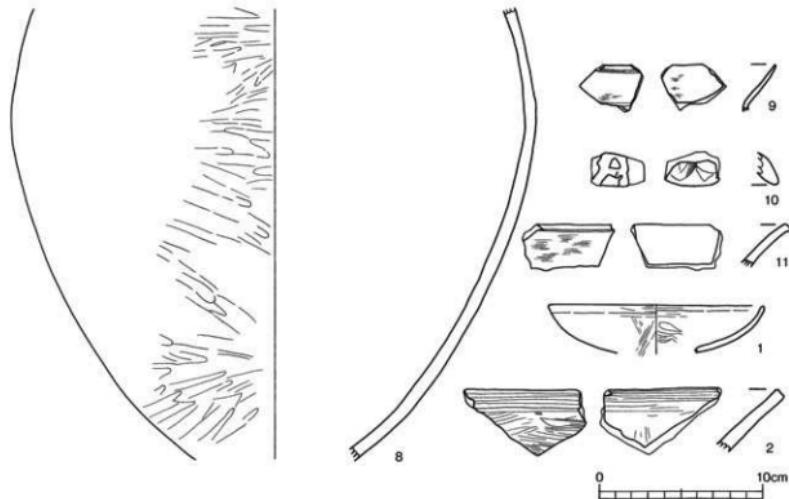
第136図 40号竪穴住居跡出土遺物(1)

40号竪穴住居跡出土遺物(第136図～138図 1～11)

1・2・4は甕形土器の口縁部である。口唇部の形状は舌状になるものである。器形は、頸部方向から口唇部がやや直立する器形であると思われる。3は甕形土器の頸部である。頸部に明瞭な稜をもち、頸部外面には搔き上げによる調整が施されている。5は壺形土器の胴部～底部付近である。外面の調整はミガキが施されており、つくりは丁寧である。外面にはミガキが施されている。9は小型丸底壺の口縁部である。器壁は薄く、内外面ともに丁寧なミガキによる調整が施されている。11は高坏の坏部である。内外面ともミガキによる調整である。10は脚部と思われるが、器種は不明である。外面には赤色顔料が塗布されているが、剥落している部分が多い。6は円碟を使用した磨石である。表面全体に磨面が観察できる。7は石皿である。



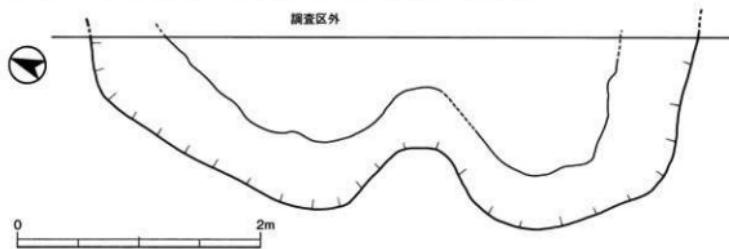
第137図 40号竪穴住跡出土遺物(2)



第138図 40・41号竪穴住居跡出土遺物 (8~11・40号 1・2—41号)

40・41号竪穴住居跡出土遺物 (第138図)

1は器台である。器壁は薄く非常に丁寧であり、内外面ともミガキによる調整が施されている。2は壺形土器の口縁部のようであるが、器種は不明である。内外面の調整はナデであり、内面にススが付着しているのが特徴的である。口縁部の形状は平坦になる。

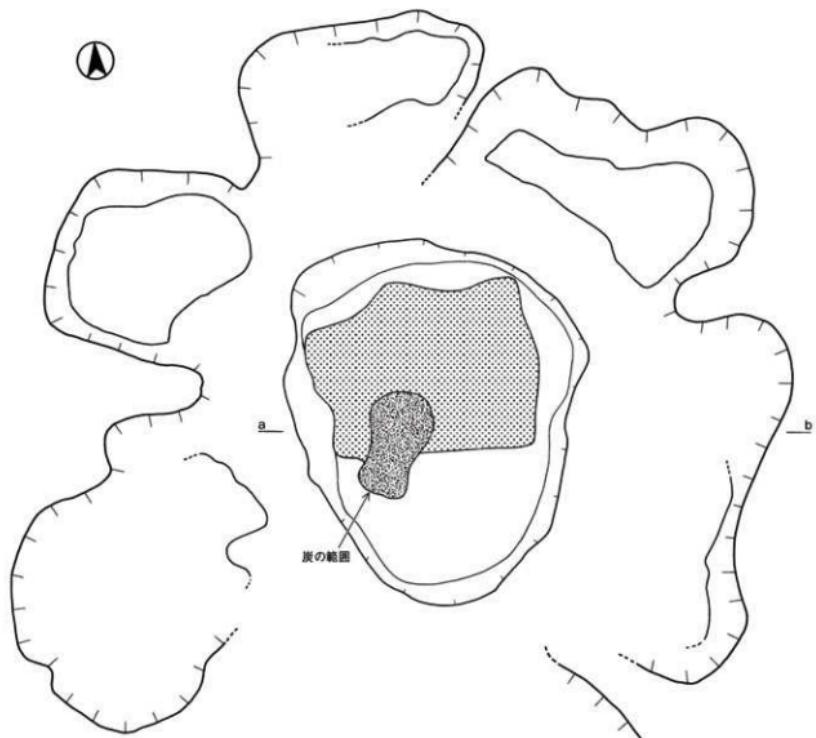


第139図 41号竪穴住居跡 (8~11・40号 1・2—41号)

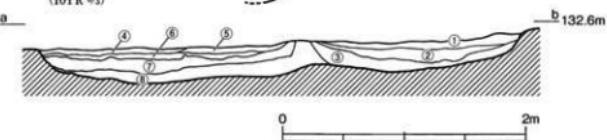
41号竪穴住居跡 (第139図)

A-23区、Ⅲa層で検出した。形状は長軸500cm×短軸94cmの不定形である。この住居の東側は、調査区外のためすべてのプランを確認することはできなかった。東側の壁で埋土観察を行いながら中央部分から掘り下げていった。掘り下げていくと、この住居の床面とおもわれる硬く締まつた床面が確認された。形状は縁辺部が中央にくびれており、花弁状住居の花弁の一部のようなものであることも推定できる。

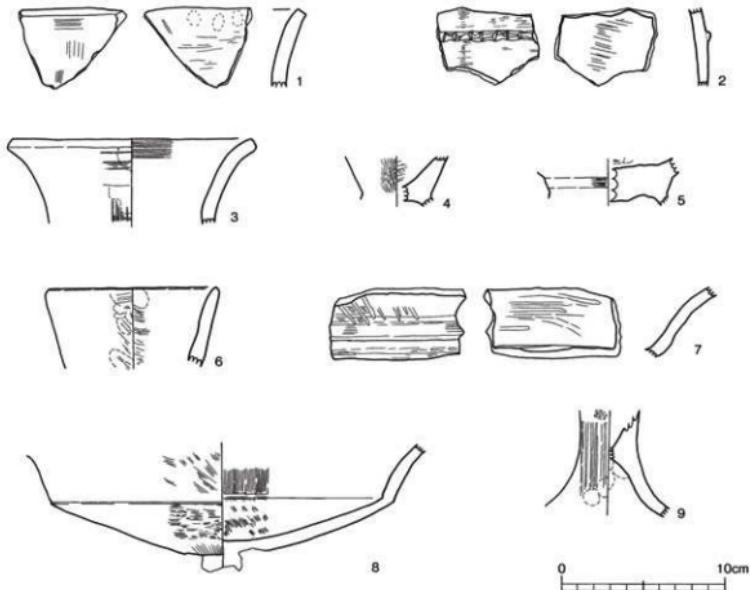
出土遺物は少量で、接合作業を経て2点を図化した。



- Ⓐ にぶい・黄褐色土
 - Ⓑ 灰黄褐色土 やや硬質
 - Ⓒ 灰黄褐色土 やや硬質
 - Ⓓ 黑褐色炭化物層
 - Ⓔ 灰黄褐色土
 - Ⓕ にぶい・黄燈色硬質土(硬化面)
 - Ⓖ にぶい・黄褐色土・黄燈色バニス混
 - Ⓗ にぶい・黄燈色土
- (IOYR 4/5)
- (IOYR 5/2)
- (IOYR 4/2)
- (IOYR 3/1)
- (IOYR 4/2)
- (IOYR 4/4)
- (IOYR 3/4)
- (IOYR 4/5)



第140図 42号竪穴住居跡



第141図 42号竪穴住居跡出土遺物

42号竪穴住居跡 (第140図)

B-22・23区、IIIa層で検出した。形状は長軸約714cm×短軸約550cmの不定形である。縁辺部に張り出しを多くもつといわゆる花弁状住居である。埋土を掘り下げて行く過程で、不定形の色の違うプランが確認できた。さらに色の違う場所を掘り下げていくと、縁辺部のプランは花弁状になっていた。調査は埋土観察ベルトを設定して、中央から床面を確認していく方法で掘り下げていった。中央部からこの住居の床面と思われる、硬くしまった貼り床面が検出された。中央の床面は梢円形であり、中央部で一段掘り下げてあることが確認できた。検出面からの床面までの深さは約28cmを測る。中央部から6基の放射状にのびる張り出し部分を確認することができた。この張り出し部分は、一段掘り込んで造ってあることが確認でき、床面のレベルは、中央部と同じであった。張り出し部分には、中央部にあるような、硬く締まった硬化面は確認することができなかった。

ピットは確認することができなかった。出土遺物は、中央部より高壙の土器片等が出土し接合作業を経て、8点を図化した。

42号竪穴住居跡出土遺物 (第141図 1~9)

1は壺形土器の口縁部である。下方に若干頸部を残す。頸部には搔き上げがみられ、口唇部は平らである。5は壺形土器の底部である。底部外面は粘土を中心部に寄せてある。3は壺形土器の口縁部である。口唇部で外反し口唇部中央に、沈線が入る。2は壺形土器の胴部である。胴部に一条の突帯があり、ヘラ刻みによる調整がある。6は鉢の口縁部～胴部である。おもに内外面とも

にナデで調整されているが、指オサエのあとがある。4はミニチュア土器の底部である。7は高坏の坏部である。内外面ともに、ミガキによる調整がほどこされている。8は高坏の坏部であり、胴部で屈曲し明瞭な稜をもつ器形をしている。この遺物の特徴は、口唇部を意図的に打ちかいた痕がある。

43号竪穴住居跡(第142図)

A・B-24区、Ⅲa層で検出した。形状は長軸約646cm×短軸約280cmの不定形である。東側の一部が調査区外であるため、全てのプランを検出することができなかった。検出面からの床面までの深さは約62cmである。埋土を掘り下げる過程で、不定形の色の違う色のプランが確認できた。さらに掘り下げていくと、縁辺部に花弁状のプランを確認した。中央部は、長軸約280cm×短軸約180cmの長方形を呈している。中央部は、一段深く掘り込まれているのが確認できた。また中央部には、この住居の床面と思われる硬く締まった貼り床面が明瞭な形で残存していた。検出された花弁状のプランは4基で、これらはこの住居の張り出し部である。

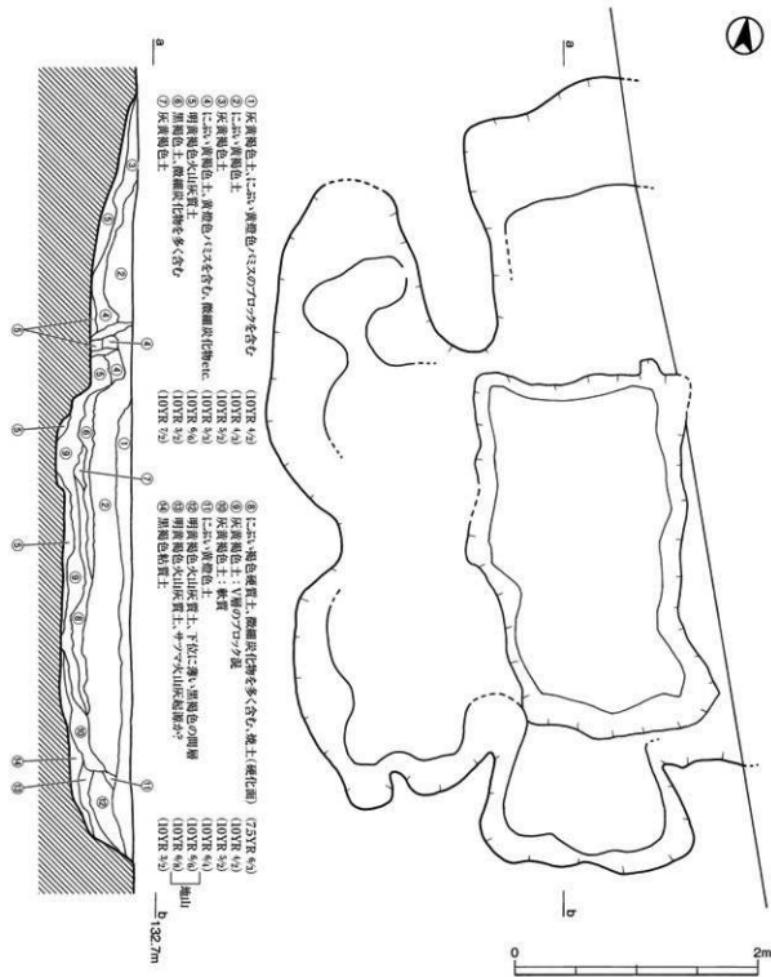
この住居からは、ピットは検出されなかった出土遺物は、成川式の壺形土器や壺形土器の土器片が出土し、接合作業等を経て、15点を図化した。

43号竪穴住居跡出土遺物(第143図 1~18)

1~6は壺形土器の口縁部である。5の口唇部の形状は舌状であり、それ以外の口唇部の形状は平坦である。器形は頸部から口縁部にかけて、外反していく器形を成している。2・5は頸部外面に搔き上げによる調整がある。7は壺形土器の頸部である。頸部外面には搔き上げによる調整がある。8・11は壺形土器の胴部、口縁部である。8は外面に一条の突帯を有し、ヘラ刻みによる調整がある。9・10は壺形土器の底部である。13は小型丸底壺である。調整は丁寧で、器壁は薄い。底部外面に一段屈曲する明瞭な段がある。18は亜円錐を使用した砥石で表面及び側面に、使用痕がみられる。

第34表 39~41号竪穴住居跡出土遺物観察表

件名	住居 NO	番号	器種	部位	口径 cm	底径 cm	高さ cm	調整・文様		色調 内面	土	備考
								外縁	内面			
134	39	1	壺	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	にかい縫	石灰、黄石、角閃石	—
		2	壺	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	黒縫	暗赤褐	石灰、黄石、角閃石
		3	小型丸底壺	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	縫	—	—
		4	壺	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	にかい縫	石灰、黄石、角閃石	—
		5	壺	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	暗赤褐	暗赤褐	石灰、黄石、角閃石
		6	壺台	縁部	—	14	—	ヘラとガキ	ヘラとガキ	縫	—	—
		7	壺	底部	—	3.4	—	ミガキ	摩耗	暗赤褐	石灰、黄石、角閃石	—
136	40	1	壺	口縁部	—	—	—	ナデ	ケズリ、ナデ	にかい縫	にかい赤縫	石灰、黄石、角閃石
		2	壺	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	黒縫	暗赤褐	石灰、黄石、角閃石
		3	壺	縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	黒縫	暗赤褐	石灰、黄石、角閃石
		4	壺	口縁部	—	—	—	ハケメ	ケズリ	にかい縫	にかい赤縫	石灰、黄石、角閃石
		5	壺	脚へ底部	—	—	—	ミガキ	—	黒縫	暗赤褐	石灰、—
138	41	6	壺	脚部	—	—	—	ミガキ	ナデ	にかい縫	にかい赤縫	石灰、—
		7	壺	口縁部	—	—	—	ミガキ	モザイク	明赤縫	明赤縫	石灰、黄石、—
		8	小型丸底壺	口縁部	—	—	—	ミガキ	モザイク	明赤縫	明赤縫	石灰、黄石、—
		9	小型丸底壺	口縁部	—	—	—	ミガキ	モザイク	明赤縫	明赤縫	石灰、黄石、—
		10	壺	縁部	—	—	—	ミガキ	摩耗	赤	暗褐	石灰、黄石、角閃石
		11	壺	脚部	—	—	—	ミガキ	ミガキ	にかい縫	暗赤	石灰、黄石、角閃石
		12	壺台	縁部	13	—	—	ミガキ	ミガキ	縫	石灰、黄石、角閃石	—
137	40	1	壺	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	にかい赤縫	暗赤	石灰、黄石、角閃石
		2	壺	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	にかい赤縫	暗赤	石灰、黄石、角閃石



第142図 43号竪穴住居跡